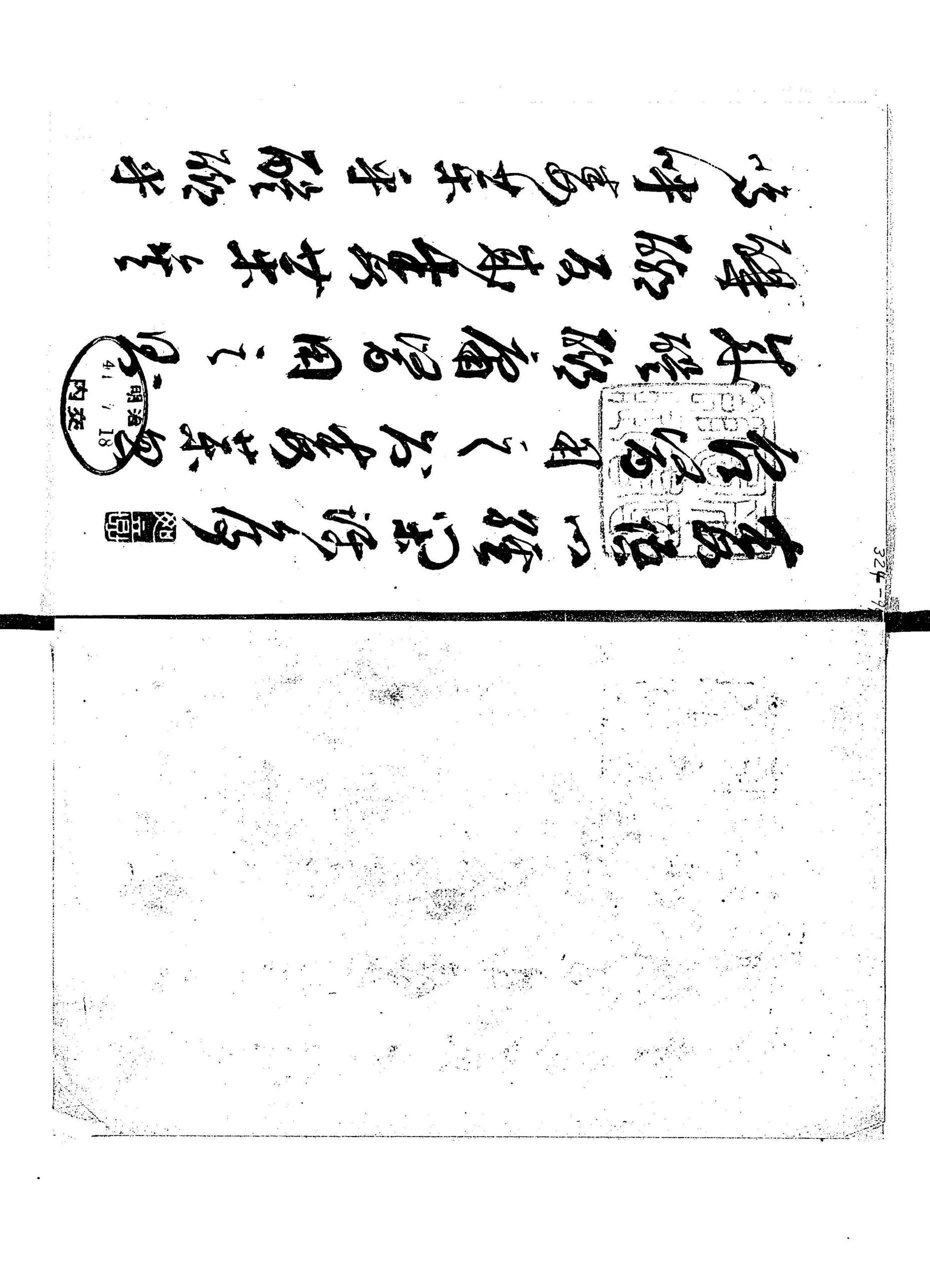
コ893

324
74

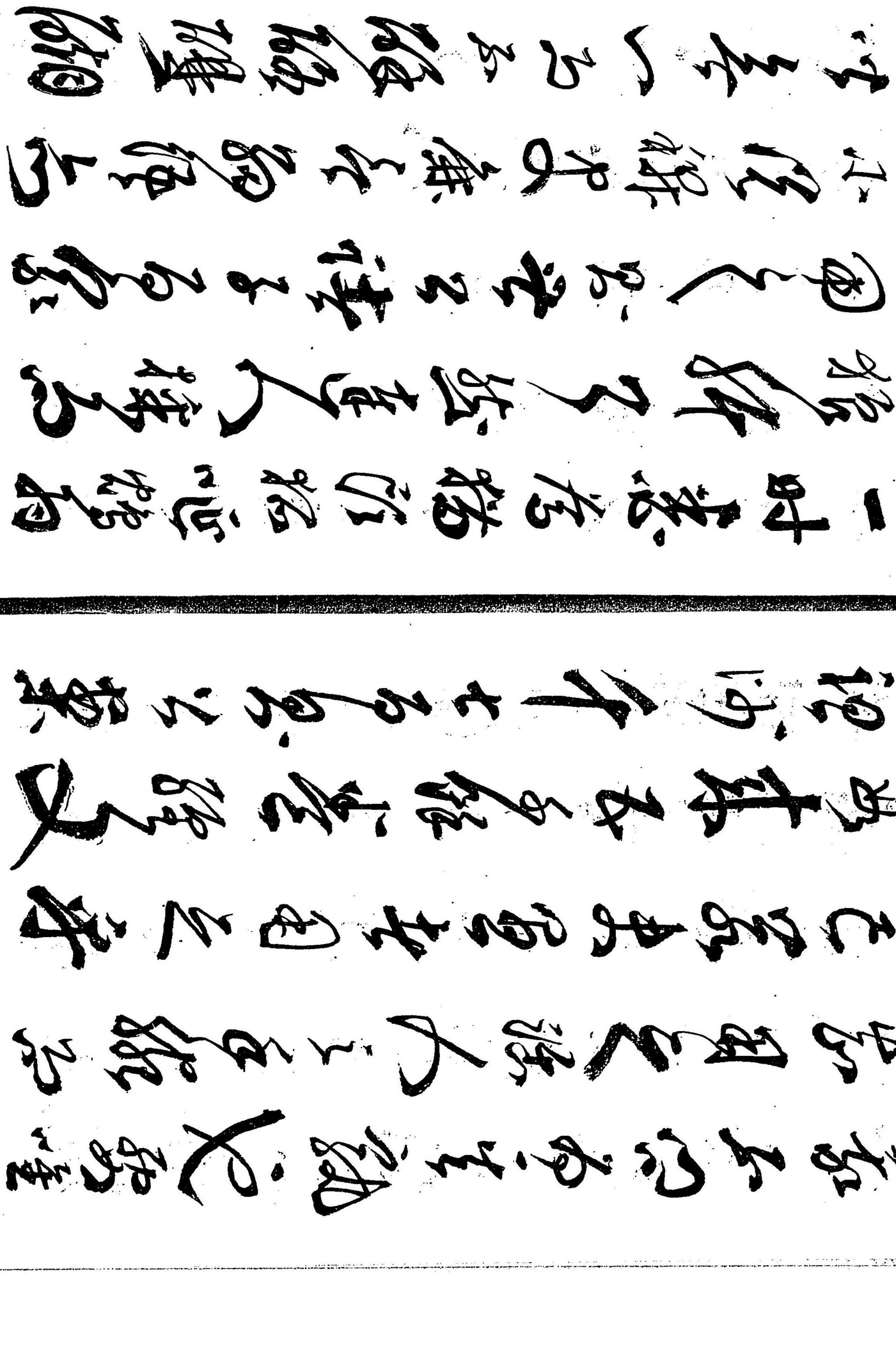
白隱禪師
毒語心經閑話

釋宗演禪師序
居士講述川尻寶岑

東京兩國
すゞや書店發行



324-7



[illegible]

之法德國憲兵隊之
例令、現在我軍佔領
地者本國本例法律
外無一法律可以
加於我軍之上我
軍之行動只受
我軍之命令

外國人民(敵國人
民)在我軍佔領
地者本例法律
一律適用、無本例
之明文者從
其本國法律

序

吟咏千来雲月雅松
言語五味風雅
入佳人宗演

宗教普路

明治三十七年の秋　吾の道伴友ともこれのれ去りて、予は毒語心経の講説せんことをこいねがる、はもと夢の悔のあきり浅く、詞の道をもたとゝしき身にて、はるる幽遠く霊妙なる経文ものの解釈せんことを、いとゞ恥ずかしく、をこの書きあつめ、はりとも人々の志の切なる、えもまよひなきまで、

先師先達の或は或へ論しられおきたる
語り示されしなれども、これ思ふ人を、
即ち文月中旬より湯治なる麟祥禪院に
講莚を開き、おほつかなく麟祥を第め、
けるもとより従きひのめは多くきを其時
筆記せし人ありて、こをもて梓に
のわせ出せし、実にこれこの時人をうるて、
とはつられと、かの駟も舌おのはさるを

いなのせん、唯道ふ以上取り除ける人の、
この書を抜き見られて、誤謬のふ、い
たらん給へは、我こわるさ以ふまも
ひく、道のあいのはのうる無こう
ます、

故に序弾をはけこのの
ことつるくふかたらの巻

明治四十年七月

川尻寶岑

白隱禪師毒語心經閑話

川尻寶岑口述
小野田亮正速記

毒語心經

是は般若心經の本文へ。白隱禪師が著語と偈頌とを添られたもので。而かも惡毒の語を以て唱へられたといふことで。毒語心經とは題したもの。早く云へば般若心經に對つて。俗に言ふ惡たいを言れたといふこと。世間のことにして見ても。他人が何か好言語を言れたのが。此方の心に適つて。何と譽ても譽足りないと思ふときには。ア、どうも惡い〳〵たまらない。抔といふ語が出るやうなもので。是は抑下卓上と言うて。言語の上に惡く言って。其實大に譽上るので。著語の體裁も是と同じこと。然れども是許りに限るのでは無い。まだ種々意味の有

ことで。其一とつを言うて見れば。何程貴とい金言でも妙語でも。一ト度ト言句の上に出て。書に顯はした以上は。後世必ス誤解の生ずることは。人間世界の數で有て。其位地に至らずして其妙語を摸索して。自分の分別を擬つて居れば。差悞は當然。邪人正法を說ケば正法忽チニ邪トナル。ソコデ此ノ誤解を疾視で豫じめ叩き落すのが。即チ著語の一とつの趣意で。強ちに惡口を云ふ許りが本意では無いので有るから。其つもりで聽て貰はねばならぬのじや。扨又此ノ般若心經といふ御經は。大般若六百卷の中には無いので。大般若經は佛涅槃の後。畢波羅窟で結集されたもの。此ノ般若心經ハ其より後れて出來たもので。又此ノ心經は佛の會座で佛勅を奉じて。觀音大士が說れたもの。而かも此ノ觀音大士といふ御方は。假りに菩薩の形を現じて。釋尊の化の副手を成された御方で。其ノ實は過去佛の化身で有るからして。觀音大士の說法は。取も直さず佛の直說になるので有る。夫から又佛の法會の席には。必ス請願主といふ者が有て。其願主がいち〳〵佛に問ヒ奉つて。佛の法輪を引起すといふのが。凡ての法會の儀式で有るので。金剛經の會座では須菩提。楞伽經は大惠菩薩といふやうなわけで。此ノ般若心經の會座の請願主は即チ舍利弗で有る。夫故觀音大士がいち〳〵舍利子〻〻〻と呼ヒかけて般若の妙旨を說與されるので。又白隱禪師の著語も頌も。凡て觀音大士へ當つてゆかれるので有るが。是レ亦直に佛へ對するの道理に當るので有る

著語並頌

此ノ一段は本文にかゝらぬ前に。心經の全文へ當てゝ。著語と頌とを置れたので。まづ毒語の緒を開かれるので有る。前に本文が無いからして。ソコデこゝへ著語並頌と斷はつたもの。夫レから又此本文に。一等高く擧て有るのが心經の本文で。一段下て書て有るのが著語で。夫から又一段低く五言句七言句に作て有るのが頌で有るので。是から以下の本文は。始終皆此ノ例で有る

葛藤窟裏瞎老漢。無裩卻歸草裏坐。可憐傅大士處々失樓閣。莫

言冷淡無滋味。一飽能消萬劫飢。

撥轉參天爛葛藤。　絆纏四海五湖僧。

願君認得出身路。　藕線孔中弄快鷹。

○葛藤窟裏の瞎老漢　葛藤とは文字言句のこと。左右學者が文字言句に着てまはつて。自己の眞實の見えないのは。恰ど藤葛が松や槍に纏ひ着て。容易に放れぬやうなものじやといふことを譬へたもの。ソコデ葛藤と云へば直に文字言句のことになるのである。窟裏とは巖洞の内といふこと　瞎老漢とは盲爺といふこと「是から般若を說」といふのは誰じやと思ふたら。例の葛藤の中に屈みこんで居る瞎老漢か」とまづ首發から叩き落した。是が毒語の幕明きじや。しかし此の瞎の字には子細が有る。輕々に看過すまいぞ。扨斯う觀音大士へ抵つて置て。併せて白隱師が著語や頌の煩援ことを書たといふ自身のことにも係て言て居るのじや

○無裩卻歸草裏坐　「此の瞎老漢が眞裸で布裩も結ず。草だらけな中に泥塗に成て兀坐つて居る處はイヤハヤ見られた狀では無いわへ」と斯う一つ言て置て夫から

○可憐傅大士處々失樓閣　傅大士は梁の武帝の時世に居た人で。彌勒菩薩の再來じやといふ。依て今彌勒菩薩と云べきを。シャレて傅大士と云たので傅大士に用は無いのじや。單へに彌勒菩薩を指ので有る。彌勒菩薩は廣大な樓閣を構へて。其處に住で居られたので。彼の善財童子が南方五十三人の善知識に參じて最後に彌勒の樓閣に入て。端的を得られたといふことが。華嚴經に出て居るが。此の廣大な樓閣といふのは。天地世界を統て言ふので。彌勒菩薩が樓閣を作て坐といふのは。世界を建立して居るといふこと。ソコデ白隱師が「觀音大士に眞裸に成て說出されては。天地も世界も何もかも無くなつて仕舞から。大小の彌勒大士も樓閣を失つて。住所が有るまいヤレ可憐に」と云按排に言たも

の

○莫言冷淡無滋味　冷淡とは味の無いこと。觀音大士が般若の眞空を誤れるが。此ノ空には子細が有るぞ。文字の空を强被て味も鹽氣も無いといふまいぞ」

○一飽能消萬劫飢　一飽の飽ノ字はこゝでは喰ことになる「此ノ心經の眞味を一度眞實に喰たなら。萬劫末代腹の減るといふことは無くなつて仕舞ぞ」と此ノ二句の中には白隱師が自身の毒語の事も含せて言て居るので。次の頌の意に係るので有る

○撥轉參天爛葛藤。絆纏四海五湖僧　撥轉はハラヒテンズルと訓字じやが。今こゝでは覆被の義に扱ふので。參天は天に參るの義で。最も大きなといふこと。爛はタヾレルと訓字じやが。こゝでは爛葛藤は枯た茨といふことに見るのじや。絆纏はツナギマトフと訓字で。縛りつるといふこと。四海五湖の五湖は。支那の五湖を借りて云までのことで。世界中と云ふこと。僧とは僧侶の爲に書れた

物故。僧ノ字を置れたので有るが。實は僧俗ともに廣く係て言はれるので有る。「今白隱が天に彌漫ほどの毒語の枯茨で。世界中の僧俗を縛りあげて。身動きの出來ぬやうにしてやるぞ」

○願君認得出身路　君とは廣く修行の人を指ので。出身路とは自由に功用を起す道といふこと。認得はミトメウルこと「其ノ身動きのならぬ處で。自由に働きが出來なければ役に立ぬぞ。サア一とつ働いて見ろ」と一本鍼を刺つけたのじや。こゝで自由に身動きが出來るやうになると。不思議な功用が現じて來る。何樣な功用が出るかといふと。

○藕線孔中弄快鷹　「蓮の絲の穴の中で。鷹狩をして遊ぶことが出來るは」と此一句で心經の端的を示したもの。まづ斯う一とつ摘出して置て。是から本經へ這入るので有る

摩訶

唐飜云大。是什麼。四維上下無等匹。多錯作廣博會了。君子愛財取之有道。爲我過小底般若來

百億須彌毫末露　三千世界海中漚

蟭螟眼裏雙童子　玩弄閻浮爭未休

○麻訶　是から以下の上段の心經までの十字は。本經の題號で有る。摩訶とは梵語で。是に大多勝の三義を有て居るのであるが。支那には此三義を有た文字が無いので。大字を當て譯して有る。此の大字は。小に對する大では無く。絶對の大で。果も限りも無い廣大の義で。さう見るときは多と勝との義も自ら含まれて來るので有る。此摩訶の解を師の捷解云。心之物爲。無始無終十方法界に瀰淪す。造次ニモ此ニ在リ。顚沛ニモ此ニ在リ。而之ヲ求ルニ更ニ不可得也。(中略)諸ノ言說ヲ離レ。心緣ノ相ヲ絶シ。非有非無非聲非色無名無相不可思議ナル者也。唯此ノ妙用有テ而不可得ナル處ニ名ケテ摩訶ト曰フ也。とある。實に眞切な解釋で。まづ此等から味つてゆくので有る。處へ白隱禪師が

○唐飜云大　「摩訶とは支那で飜譯して大といふ事じやが。大と云へば大字に着てまはる直に差悞て仕舞ふは」

○是什麼　大なぞといふものがどこに有るぞ。どういふ了簡で大なぞと云うか。詰らぬことを云たものじや」

○四維上下無等匹　四維とは四方と云も同じ事。等匹はヒトシクナラブといふことで對待のこと。「大と云へば小といふものが付てまはるは。凡そ天地世界中に。等匹は無いはづじや」

○多錯作廣博會了　「摩訶と云へば。左右廣い大きなことじやと許り思ふか。其が大錯りといふものじや」

○君子愛財取之有道　此一句は白隱禪師が力で置れたもの。文義一ト通りで云へば。君子といふものは財寶は大好きで有るが。しかし安りには取らぬとい

ふことで誰にも解りきつたことじやが。白隱師がこゝへ置れた意は。更に別に在るので。大に子細の有る一句じや。是は講釋の仕樣は無い。銘々冷暖自知のものじや

○爲我過小底般若來　「大といふからには小が有う。其小さい般若を出して見せろ。サアうけ取うか」とズツト手を出されて居る樣子あひじや。夫から偈頌じや

○百億須彌毫末露。三千世界海中漚　百億の須彌といふことは。まづ一とつの須彌山に日月と天部と四洲とが添て是が一世界で。其を千寄たのを小千世界と云。其小千世界が又千寄たのを中千世界といひ。其が又千有る。是を大千世界といふ。其で恰ど百億の日月百億の須彌となるので有る。毫末とは秋に成て獸の毛がぬけかはつて。其生たての。極々細い尖先といふこと。三千世界は前にいふた大千世界と同じこと「摩訶の大のといはれるが。白隱の眼から見ると百億の須彌山も毫末の先から落る露くらゐなもの。又三千の大千世界も。大海の中の一粒の漚ほどのものもないわへ」

○蟭螟眼裏雙童子。玩弄閻浮爭未休　「大と許りは片付られぬ。極々小さい物も有るぞ。今其小さい物を出して見せやう」と按排に云ひ出すのじや。蟭螟とは夏頃軒先に群つて居る蚊といふ小さな飛蟲が有る。其蚊の睫毛の中を世界として住で居る蟲を蟭螟といふ。其又蟭螟の眼の中を住處として居る二人りの童子が。玩弄閻浮と。閻浮とは閻浮提というて。須彌の四洲の中の南部の一洲で是を南贍部洲といふ。即我人の住で居る此地球のこと。爭未休とは其二人りの童子が此閻浮を毬について。一とつとやア一とよ明れば賑やかで〳〵ソラ勝たよおまへに貸たよと。遊び戯れて樂しんで居るといふこと「どうじや此小さえ物が見えるか。これが見えねば大きな摩訶と見えたとは云はれぬぞ」といふ按排に言れたもの

般若

唐飜云智慧人人具箇箇圓弄泥團漢有何限不嶮崖撒手未曾見在何故燈下不截爪可令尺蠖辨長短莫使蝸牛耕石田

雙耳如聾眼如盲　虛空夜半失全身

不容令鶩子親見　戾腳波斯過別津

○般若　は梵語で飜譯して智慧と云ふ此智慧は怜利と愚鈍との差別なく人と生れながら具有して居る本智のこと

提解云人々妙用自在ノ德ヲ讃歎スル明言也(中略)妙用ニシテ自在ナルヲ暫ク名ケテ智慧ト曰フ此智慧ヲ肇法師別ツテ二ト爲ス決定シテ理ヲ審ニスルヲ智ト謂フ造心分別スルヲ慧ト謂フト然レバ則チ一念ノ思慮分別ニ因テ或ハ邪ト爲リ或ハ正トナリ或ハ佛ト爲リ衆生ト爲リ菩生ト爲ル皆一念之分別ニ隨テ變化スルコト譬バ明鏡之諸色ニ隨テ像ヲ現スルガ如シ如此一切善惡之諸法ヲ現スト雖モ了ニ法相ヲ藁ラ不也故ニ華嚴經ニ曰心佛及衆生是三無差別ト今日用事上ニ於テ之ヲ試ムルニ貪瞋癡ノ念時ニ或ハ起ル時ニ或ハ起ルト雖モ之ヲ究ムレバ本來無自性也故ニ親ク自知シテ味マサ不バ則チ起ルニ似タル貪欲瞋恚即チ我ガ本智不生不滅之佛心也と有て今ここに無自性と有るのが人々が心と認て居る妄心のことじや此妄心を心と認て居る故に般若の本智を味まして仕舞ので有る所以に今本經にいふ般若の二字は妄智妄我の少しも交らぬ本心本具の眞智を指て明したもの されば本經に擧て在る處の般若の二字は凡て此意で見るので有る

○唐飜云智慧人人具箇箇圓　「般若といふは譯して智慧といふことじやが其智慧ならば人々生れながら具有して居る處のもので箇箇圓に成して居て少しも缺目は有はせぬ故に云ひ出すには及ばぬことじや」

○弄泥團漢有何限　「摩訶の般若のと有もせぬ名を立て。名目に粘着て居るのは。眞正明珠を棄て置て。泥團子を翫弄にして嬉しがつて居るといふものじや。そんな物が何になるもので。泥團子をニヤツカイにして居るうちは。何處まで往ても果しは無い。到底眞實を見ることは出來はせぬぞ」

○不曾撿崖撒手未曾見在　是は古語に。撿崖ニ手ヲ撒シテ絶後ニ再ビ蘇ルガ如クナル時節有りといふて有る。其を文と略して擧たもので。是は眞實に修行して一心の開ける樣子を譬へたのじや。撿崖とは千丈もある谷に臨んで居る絶壁の斷岸のこと。撒手とはその懸崖の鼻に突立て。大手を擴げて其谷底へ飛込こと。絶後再蘇とは。大死一回して而して再び蘇つて來るが如くじやといふこと。是則我見我執の迷ひを打殺す修行の形狀を譬へたもの。此我執の迷ひを打殺すことは。中々の骨折りで。一ト汗帶ねば往ぬのじや。ソコデ未曾見在とは。「おれが〳〵の我慢心を眞實に打殺して見なければ。正眞の見性は出來ぬぞ」といふこと

○何故燈下不截爪　「何故ならば。燈火の下では爪は取らぬはと。是はなんのことじや。決して句義には拘つて居らぬので。實に思量分別の及ばぬ處へ當られた一句じや。是は講釋は出來ぬ。まづ此一句で前を結んで置く。是から次の二句は學者へ示すのじや

○可令尺蠖辨長短莫使蝸牛耕石田　尺蠖は俗に云ふ尺取蟲の事。此蟲が能く伸たり縮んだりする處から尺取といふ名は付られて有るのじやが。尺蠖其物で見ると。物の長短を辨へる智慧は無いのじや。其無い智慧を暫くあると許すともといふ意味で。小兒が無物强請などしたときに。母親が頓辭に。赤い雪が三ツ降たら遣ましやうとか。お正月が三ツ有たらなどゝ。俗にいふのと同じことで。實は無いことじやが。夫は有ると許すともと。次の一句へ重味を持せる枕詞に置たもので。而して後の句を引起すのじや。蝸牛とは俗にカタツムリといふこと

ふ蟲のこと。紆紆して居つて柔らかいもの。此柔弱い蝸牛をして。堅固い石の田地を耕させる事は決して出來ぬことで有るぞと。斷言したもの。蝸牛は譬へで。彼方へ匍行此方へ匍行見るもの聞ものに就てまはる。妄念分別の我見に擬たもの。此我見我執の分別を以て。自己の本源を摸索まはつても。到底秋の實は得られぬぞといふこと

○雙耳如聾眼如盲　此般若の眞體は。眼に見ることならず。耳に聞くこと出來ず。口に言ふこと出來ず。意に思ふこともならぬ處のもの。其見ることも聞くこともならぬ容子を言うて見れば

○虛空夜半失全身　「夕邊夜半の暗黑な處で。虛空が其身を失つて仕舞た」一體虛空といふものからして。人間の眼にはからぬもの。其虛空が又身を失つて仕舞たやうなもので。迚も思量分別で屆く場所では無いので有る。夫故に

○不容令鶯子親見　と鶯子は舍利弗の事。舍利弗は十大弟子の中で智慧第一の人「大小大智の舍利子弗でも。こゝの場所ばかりは見ることは出來ぬ。其舍利弗の大智を以てすら。見ること出來ず窺ふことのならぬ場所は。只空々なものかといふと。さうで無い。然らば其場所にはどんなものが有るかといふと

○戾腦波斯過別津　戾腦はチンバといふこと波斯はエビスの事別津とは他國の渡船場といふこと「跛足の夷が西湖の月を見に往たは」と是はなんの事じや。色をも香をも知る人ぞ知るじや

波羅蜜多

唐飜云到彼岸者裏是什麼所在。掘土求青天。蝦跳不出斗。寶什在近更進一步。釣絲絞水謝郎舟。明眼衲僧。暗結愁

大地誰是此岸人　甚憐錯立洪波津

參究若未命根斷　修歷三祇枉苦辛

○波羅蜜多　は梵語で譯して到彼岸といふ。人間世界を此岸といひ。夫に對して佛の淨土を彼岸といふ。到彼岸とは衆生界を離れて。佛果に到るといふこと。此ノ到彼岸を義で譯すれば。不生不滅と云ふ事になる。註解ニ云ク不生不滅之涅槃ヲ證スルヲ謂フ。畢竟前言ノ妙理ヲ冷暖自知シテ生死之幻影ニ迷ハ不ヲ謂フ。生死ト云フ者「何ゾ吾身相ヲ認ム是レ也。」と。然れば摩訶般若波羅蜜多とは。一と口に云へば。根本の大勢を以て。不生不滅の眞體を獲得するといふことじや

(著)唐譯云ク到彼岸。者裏是什麽所在　者裏とは這中といふことで。天蓋地蓋盡十方法界をさしていふので「波羅蜜多ならば譯して到彼岸といふから。不生不滅といふのか」者裏是レ什麽所在「そんなものが何處に有るぞ。凡そ宇宙のあいだに不生不滅なぞといふものは何處にも有はせぬは」

○掘土求青天　「大地を掘て青空を見やうとしても。どこ迄掘ても青空の見やうは無いは。不生不滅なぞといふ文字言句に付てまはつて居るうちは。永劫

かゝつても活た佛性は見ることは出來ぬぞ」

○蝦跳不レ出斗　「蝦雜子が桝の中でヒョコ〳〵鑑まはつて居るやうなもので。いくら鑑ても跳つても桝の外へ出ることは出來ぬは」

○寶所在レ近。更進一歩　寶所在近の四字は法華經に出て居る句で。寶所とは極樂のこと「しかし前のやうにはいふものゝ。人々固有のものじやから。妄分別の小才覺さへ離れて仕舞へば。直に佛性は現前するのじや」他所の物を搜すのでは無い。身の內に有て居る物を見附るのじやから。此くらゐ近い物は無いので。或男が極樂へ往ふと思つて。西方十萬億土じやから。其途中の糧を用意せねばならぬと。まづ船艤ひをして。十分の糧米を積込で。西方をさして漕出した。夫から精限り根かぎりセッセと櫓を押てやつて往た。頓て千里も來たかと思ふ頃。向ふから漁船が來たから。モシ〳〵是から極樂へは何程ございますと尋ると。十萬億土有升といはれた。ヤレ〳〵夫では今迄來たのは徒で有たと。夫か

ら又セッセと漕でいつたが。身體は勞れる腕は草臥る力も根機も盡き果て。落膽したが。モウ餘程近く成たらと思つて居る。處へ向ふから舟が來たから。モシ是から極樂へは何程ございますと尋ると。極樂は十萬億土有升といふ。イヤバヤまだ十萬億土有るか夫では今迄骨折て來たのがまるで徒に成て仕舞た。と思つたがなんでも極樂へ往ふと思ふので。又一生懸命に漕で往くと。又向ふから舟が來たから問て見ると。ヤッパリ十萬億土有るといふ。何處迄往ても十萬億土有る。是では所詮極樂へは往れない。思ひ絶て歸らうと思つて。チョイト後をふり向て見たら。極樂が背面に密兮着て居たといふ話しが有る。更進一歩。身體に具有して居るものを見附るので有るから。誰にでも知れぬといふことは無いので有る「一とつ眞實に此形骸を飛出して見ろ。不思議な功用が出て來るぞ」とどんな功用が出て來るかといふと

○釣絲絞水謝郎舟　　謝郎とは玄沙大師のこと。玄沙大師は謝氏の子で。漁夫で有たので。年中舟に居て。釣をして居られたのじや。釣絲絞水とは。釣絲といふ物は決して水を含まぬもの。夫故釣糸から水を絞り出すといふことは到底出來ないことで有る。所が玄沙大師のやうに眞實に飛ぬけて人になると。此妙境が手に入るので。譬ば兩刃交鋒不須避といふて。達人と達人とが鋒を合せた時には。どつちにも一點の隙が無く。双方に進手も退手も無いといふ場合に臨んで。而かも自由に進手も退手も有るといふ。自在な功用が出て來るので。是は見性の上の練磨で有て。こゝに至つて始めて天下の大道師となるので有る。

○明眼衲僧暗結愁　　いかなる積德の高僧でも。此釣絲絞水の妙境に至つては。容易にはゆかぬので。始終心に愁ふる所で有るので有る

頌　大地誰是此岸人　　「儞は到彼岸といひなさるが。此岸といふ岸がどこに有るぞ。世界中の人は皆佛じや。此岸の人といふ人は。一人も有はせぬは」

○甚憐錯立洪波津　　洪波津とは洪きな荒波の打寄る場所といふこ

とで。思慮分別の妄心を指ので「生れながら美しい佛心は具して居ながら。我と迷つて妄念に滯つて。造罪の凡夫に成て。轉々地獄へころげこむヤレ可憐さうに」と言つて置く

○參究若未命根斷　參究は參禪辨道して自己を究明すること。若未とは現在即今に就ていふので。命根とは身命のこと「今此生に此身命を踏破て。本來の法身を獲得せぬ限りは」

○修歷三祇枉苦辛　三祇とは具に云へば。三阿僧祇劫といふ事で。限りも無い長い年數のこと。阿僧祇とは梵語で。譯して無數時といふ。無數時といふても。まるで數の無いといふのではない。數は有るのじやが數へおうせられぬといふ意味なので。劫は時といふこと

法數に云へ。如來始メ古ノ釋迦佛ヨリ尸棄佛ニ至テ。七萬五千佛ニ偶ヒ賜フヲ初阿僧祇ト號ク。次ニ尸棄佛ヨリ燃燈佛ニ至テ七萬六千佛ニ偶ヒ賜フヲ二阿僧祇

ト號ク。次ニ燃燈佛ヨリ毘婆尸佛ニ至テ七萬七千佛ニ偶ヒ賜フヲ三阿僧祇ト號ク。と有て算數にもかゝらぬ程の長い時刻のこと。枉苦辛とは。本來安樂の佛心は有て居ながら。自ら迷つて枉て苦穴に陷入といふこと。「今此生に覺らねば永劫浮むことは出來ぬぞ」といふこと

心

歷劫無名。錯安著名字。金屑眼中翳。衣珠法上塵。是什麼。多錯認。
驢鞍橋。學道之人不識眞。唯爲從前認識神。無量劫來生死本。癡
人喚爲本來人。
分明三世不可得　一掃長空絕點埃。
禪榻夜闌如鐵冷　半窗明月帶梅來。

㊍心　とは人々一身の主宰に付た名稱で。此心を知れば安樂を得る。此心を知らねば苦惱に沈むので。手島翁の言に心ひとつが鬼にも邪にも。なるぞ神に

も佛にもト

捷解ニ云ク是何物。吾王庫内如是物無(中略)人人本然圓明ニシテ而言語之道ヲ斷ツ。故ニ已ムヲ獲不シテ心ト名クと有て。本來名も無く相も無いもの。サレドモ名が無れば知らせやうが無いから。據なく假りに心とは名けたもの。ソコデ著語に

著歴劫無名錯安著名字　歴劫とは長い間の劫を歴るの義で。大昔しからといふこと。往古からして今日まで。本來名稱は無いもので有るに。其を故に心なぞといふ名を付たのが大差誤といふものじや。何故といふに。其名目に吊つて穿鑿だてをするから。ソコデいよ〳〵解らなくなるのである

○金屑眼中翳。衣珠法上塵　金の屑は貴いもので有るけれども。若し眼の中へ這入たら眼翳と成て大ィな邪魔ものになる。文字言句は貴重なもので有るけれども。若し是に執着たら其が心の蓋に成て覺ることは出來ぬのじや。衣珠とは法華經の五百弟子品の中の譬喩に出て居ることで。掻摘んで云て見れば。或る貧窮な男が朋友の所へ尋て往た。其朋友といふのは上等官員で富有な身であるので。此男の貧窮を憐んで。大さう饗應をした。ソコデ此男が悦んで無性に食て酒に醉て寐て仕舞た。夫から此官員が。此男の一生困らないやうに手當をして遣うと思つて居る。所へ官から急に召されたので。直に出勤しなければならぬわけ。此男の眼の覺るのを待て居るわけにゆかぬから。此男の寐て居る衣服の襟の中へ。莫大な價の寶珠を縫込で。其儘官へ出ていつた。跡で此男が眼を覺して。自身の襟に貴重な明珠の有ることは夢にも知らず。夫よりまた〳〵貧窮して。竟に乞丐と成て。彼方此方流寓て居た所。或日彼の官員が途中で此男に邂逅ました。見るといかにも貧瘁い形りで。乞丐をして居る樣子で有るから。傍は以前僕が無價の寶珠を與へて置たから。富貴の身に成て居る筈じやに。何故乞丐をして居るのじやといはれまして。此男にはさつぱり解らなかつたの

で。夫から寶珠のことを示されたので。衣服の襟を解て見ると實に結構な無價の寶が身の内に與へられて有たことを始めて知たので。是からして此男が忽ち無盡の富を得て。安心安樂の身と成たといふのが佛の譬喩で。朋友の官員を佛に喩へ。貧窮な男を衆生に喩へ。無價の寶珠を佛性に喩へたもの。安樂な本心は具て居るから。自ら迷つて凡夫となり。六道輪廻して流浪苦しんで居たものが。佛に逢て教へられて。本來固有の佛性を覺得して。絶對の眞樂を得たといふ喩への話しで。其をこゝへ衣珠といふ。何程貴い經說でも。我見妄相の分別で。文字に付てまはるときは清淨無垢の佛性の上へ。塵芥を積載てだいなし汚して居るやうなものじやといふことを。衣珠（法上ノ塵）といふたもの

○是什麼　とは本文の心の字をさすので「心なぞとはいつたいなんのことじや。本來名も無く相も無く活鱍自在の活物じや。夫を強て心じやの佛じやの」と。名を付るから人が迷ふは。

○多錯認驢鞍橋　驢鞍橋とは馬の鞍骨といふこと。昔し軍が有て親父が討死をしたので。其息子が。せめて骨なりと葬りたいと思つて。戰場の燒跡へ往て。彼方此方尋ねたがどれがどうやらさつぱり解らぬ。其中に馬の鞍骨を見附て是が親父の骨じやと思ふて。持歸つたといふ古事が有るので。是を今僞せ物をとらへて本ものじやと認て居る學者の分別悟りに喩へたもの。心じやの佛じやの眞空の無一物のと。名計り數へて分別して。解つた氣に成て居るのは。皆馬の骨を親父の骨じやと思つて居るので。大さう悟つたやうな大きなことをいふ人が有るものじやが。多くは皆此驢鞍橋のお仲間で有るのじや

○學道之人不識眞。唯爲從前認識神。無量劫來生死本。癡人喚爲本來人。　此二十八字は長沙大師の云はれた語で。世間の禪者が。自己の眞實を覺り得ぬ因由を示したもの。識神といふのは本來佛性と別なものでは無いけれども。此事を委くいふて居ると。長く計り成て却て解らなくなるから。まづ假りに佛性の

眷族と見て置くがよい。今禪門に入て見性學を修行する人が。大ていは識神を認て眞性じやと思つて居るので。識神と佛性とはまことに紛らはしいもので有るからして。こゝへ首を突込だら容易に眞實の所へは出られぬので。眞正の實性にはます〳〵遠く成て仕舞のじや。學道之人とは佛門に入て修行をする人のこと。いづれも皆刻苦勉勵して骨に骨は折るのじやけれど。而かも肝腎の自己の眞性を見徹する人が少いといふものは。全く識神を認て眞性じやと安んじて仕舞からのことで。自己の眞性は識神の今一とつ上に在處のもので。識神の破れぬうちは眞性は顯現せぬのじや。然るを識神から起る分別を頼んで。種々に考へを廻らすので。或は一念不生の所を認め。或は公案三昧に入り。或は虛空と等しき觀を起し。或は現成底を認て是とするか。いづれ我執の妄見は免れぬので有るからして。まはりまはつて從前の識神の塲へ戻るので。而かも此識神が。永劫生死に沈淪する根本なることを知らず。我が本來の佛性じやと誤認する。是を凝人。喚テ本來ノ人ト爲すといふたもの

○分明三世不可得　是から心の不可得なることを明すので。三世不可得とは。金剛經に過去心不可得。現在心不可得。未來心不可得。と有て。元來無形無相で。有無を絶したもので有るので。到底思量分別を以て得られやうの無いことは。分明と知られて居るので有る。しかも亦其不可得なるものを。明瞭に覺得する謂れが有て。到彼岸の語も唱へ出されるので。然らば如何して是が得られるぞと云へば

○一掃長空絶點埃　まづ虛空といふものを掃ひ除て仕舞のじや。虛空を掃ひ除けて仕舞たら。何樣なものになる。絶點埃といふて。更に一點の物も無い。爰に至つては正しく思量分別の屆かぬ所。といふたら又。一點の物も無ればヤツパリ空じやといふで有うが。夫が思量分別といふもので。虛空を凝視で居るうちは。所詮眞正の見性は出來ぬ。此絶點埃の三字は。大に子細の有ることで。分

別上から無じやの空じやのと見て居るのとは。まるで違つたもの。さらば如何樣なものじやといふと。此に至つては言語の道が絶えて仕舞ので嘴の容やうが無い。正しく冷暖自知の場所じや。夫には

○禪榻夜闌如鐵冷　榻は腰掛といふ字じやが。此では禪堂の單のことになるのじや。嚴寒の雪の夜にも。禪堂の單に兀坐て。夜は深々と更て來る。火の氣は無し手足は凍る。總身は冷氷る計り。如鐵つめたい。忍び難さを忍び堪えて。極熱の夏の日も。大汗帶て工夫を凝し。命を懸て骨に骨を折て。年月を重て劉苦勉勵して。此功が積り積つて。始て純點埃の三字が我物になるので。實に容易なことでは無いので有る。扨其心の開けたときは。何如な樣子で有るかといふと

○半窗明月帶梅來　「春の夜の明月が窗からスツト差込で。梅の枝を寫して寫して居る按排。どうもいはれぬ景色で有るわへ」

如是我聞一時佛在。咄。誰舒卷。多向故紙堆中。求黃卷赤軸。又百合一片

畢波羅窟裏　未結集此經　童壽譯無語
阿難豈得聽　北風窓紙隙　南雁雪蘆汀
山月苦如瘦　寒雲凍欲零　千佛縱出世
不添減一丁

㊫經　はツネノリフルなどゝ訓じて。無始以來より此向何億萬年の後までも。少しも移り易ることのない。常住不變の義を經といふ

提解ニ云ク經ハ常ノ義。法ノ義ナリ。過去久遠劫自。盡未來際ニ至テ生死ノ變滅ニ預ラ不。常住佛性本然無生之端的。之ヲ經ト謂フ。法ト者。一切衆生之心法。即經之事也。言句之レ經ニ非ス。文字之レ經ニ非ス。手ヲ拂ヲ滿然トシテ自性無キ是レ經

也。山ヲ觀レドモ山ヲ障ヘ不。川ヲ見レドモ川ヲ障ヘ不。草木國土自ラ明ナルヲ經ト曰フ。唯是ノ心ニ通ジタルガ如來之經也と有る。是が眞正の活たお經といふもの

㊀如是我聞一時佛在　此ノ八字ハ諸經の始には必ず有る處の文字で。阿難尊者が自己の意を以て說くので無いといふ證據に之を置れるので。ソコデ白隱師が「經といふのは。如是我聞一時佛丘といふ字が必出て在る。其經のことか」

○咄　「馬鹿をぬかせ」

○誰舒卷　「本來の經に形は無いは。誰が舒たり卷たりするぞ。卷も舒もなるものでは無いは」

○多向故紙堆中求黃卷赤軸　故紙堆中とは反古紙が堆く積んで有る中といふこと。黃卷赤軸とは印度の經文は日本のやうに折本には成ては居らぬ。皆卷物で必黃色の紙に赤軸で有るので。黃卷赤軸と云へば。直に經卷の事に

なるので有る。大概は黃卷赤軸の反古紙に向つて御經じやと思つて居る者が多いから。眞正の經を見る者が乏しいヤレ悲しやといふ按排に言つたものじやが。此ノ語は大ィに子細の有る語じや。早合點をせまいぞ

○又百合一片　此ノ一句には兩義が有る。まづ一とつには「五千餘卷の金文などゝいふけれども。本分の眼から見ると。百合一片がものも無いわへ」と叩き落した。是にも亦子細が有るぞ。惡合點としたら大差悞が出來るぞ。又此中には「一片百合をズット拈出じた處には。五千餘卷も大千世界ものこらず皆這入て仕舞ぞ」といふ意も含んで居るので有る。又一義には「百合といふものは。一片とれば又跡から出る。又擗ば又出る。何處まで行ても限りは無いは」と是は文字言句に懸たもの

㊀畢波羅窟裏未結集此經　畢波羅窟とは。天竺の王舍城耆闍崛山に在る窟で。佛滅後迦葉尊者が主任と成て。阿難尊者を上首として。大勢の佛弟子が。此ノ

窟中に集つて。一切經を結集されたので。未結集此經とは此般若心經は此窟裏の結集には這入て居らぬので。夫より後れて編集されたものじやといふことを述たもので有るが。是は表で。其實は。眞正の活た心經は。言句も文字も及ばぬもので。迦葉を首め佛弟子が。何樣に智惠を揮つても。此經計りは編集の仕やうは無いといふこと

○童壽譯無語阿難豈得聽

童壽は鳩摩羅什の名で。此人は飜譯の大名人で有るので。大小名人の羅什でも此經計りは飜譯の仕やうはない。又多聞第一といはれる阿難尊者でも。耳で聞くの出來ぬ心經を。どうして聞くことが出來やうぞ」といふて置て。是から跡へ。耳で聞かれぬ眞經の端的を。圓成した腹合のなんとも云へぬ樣子からを。形容して出すので有る

○北風窓紙隙。南鴈雪蘆汀。山月若如瘦。寒雲凍欲零　北風が吹入て來るから。窓の障子を占やうとして。外を見ると。今朝からの雪で。海岸は一面の白妙。

南の方の汀の蘆がいかにも美麗に雪が積つて。其傍に鴈が二三羽餘念なく遊んで居る。山の端を漏て出る月影は。亙つて寒風に姿き瘦るが如く。遙の空に一と偏の雲が。沈として少しも動かぬ樣は。今はた凍つて落るかと思ふばかり。寒夜の凄ましい中に優美な處が有て。嗚呼どうも云へぬ。アヽたまらない。好景色じや。誰にも彼にも見せたい〳〵」といふ按排

○千佛縱出世不添減一丁　「經千體の佛が一時に出現し賜ふとも。此心經には一字一點添ることも減す事も出來まい」と此句の中には自身の毒語をも併て云はれて居るので有る。一丁は具には一丁字といふて。只一字といふこと。五言句のことゆゑ字を略されたものじや。一丁字の事は。唐書の張弘靖傳に。汝輩挽兩石弓。不如識一丁字。と有る。續世說に一丁作一个。因案文个與丁相似。傳寫誤作丁。と有る。是が一丁の出據じや。扨是迄が本經の題號で。是から向が心經の本文で有る

觀自在

補陀嵓薩埵人人具大士盡大地一箇不見不自在底人咳唾掉
臂絡不假別人力誰繫縛傭著伸左手搔佛首即非無屈右手觸
狗頭何日免得

執捉運奔不假他　唯因情念積多羅
是非憎愛總拈拋　許汝生身觀自在

是から以下の經文。一切苦厄と云までの二十五字は。記者の言じや。凡て佛の說法には。其前方に一度定に入て。夫から法を說れるのが。是も一とつの儀式で有て。法華會座には。まづ無量義三昧に入て。而かして其三昧を出てから。法をお說なされたことで。今此般若心經は。觀音大士が佛の諦許を蒙つて。說かれるので。まづ最初に慧光三昧といふ定に入られたので。此三昧が即行深般若波羅密多で。下の度一切苦厄といふまでが。定中の趣きを記者が記したもので。夫から次の舍利子といふから向が觀音大士の說法じや。今一とつ云て置く事が有る。凡て經文には必序。正。流通。の三分が具はつて居るので。最初に序分と云て。まづ其法會の場所から其處に集る大衆の事など。すべて其會座の形狀を述るので。是ば記者の筆に成る處のもの。次に正宗分といふて。即佛の一會の說法で。是が全くの御經で有るのじや。夫からお說法が了た後で。お弟子等へ對して。此經を能く受持して後世へ流通せよと命せ付られる。是を流通分といふて。何の御經にも此三分は必ず有るので有るが。今此心經には序分と流通分が無くして。正宗分ばかりで有るが。是はもとより無いのでは無い。法月三藏の譯した般若心經等には。序分も有れば流通分も整然とある。此事は東嶺禪師の心經注といふ書に。委しく述られて有る。夫を中昔の人が。見る人の便宜を圖つて。序分と流通分とを略して。正宗分ばかりを判行にして世に流通したもので。夫が今世間に行は

れて居る般若心經で有るので。もとより無いのでは無いのじやから。是も序に斷つて置くので有る扨

㊟觀自在とは。或は觀世音ともいふて。眞正の菩薩の德を表した稱號で有るが。夫が此ノ菩薩の名に成て居るのじや。觀音とは觀世音の世の字を略していふので有て。いづれも一とつ御方の名で有るのじや

慥解ニ云。蓋シ大乘ノ行人ヲ指ス。觀自在ハ妙用ノ德ヲ稱讃ス(中略)觀ノ字。心觀。或ハ止觀等。皆心之妙用ニ屬ス。眼ニ色ヲ見。耳ニ音ヲ聞。鼻ニ香ヲ嗅。舌ニ味ヲ嘗シ。身ニ觸ヲ覺エ。意ニ法ヲ知ル是也(中略)六根皆心ヲ用ヒ不シテ而萬境自ラ明カナリ故ニ觀自在ト曰フと有る。されば觀自在といふ稱は。別に就て見るときは。觀音大士御一人の名稱で有るが。通に就て見るときは。大士ひとり買切りのものでは無い。誰も彼も眞心の觀自在は持て生れて居るのじやから。銘々皆活た觀音樣で有るので。此ノ身體を眞實に一とつ見ほすのが佛法の修業で有るのじ

や。夫から著語に

㊟補陀崗薩埵　「觀自在とは天竺南海の補陀羅久山に兀座て居る佛の事ではないか」

○人々具大士。盡大地一箇不見。不自在底人」　大士とは菩薩といふも同じこと

と「補陀山の佛ばかりが觀自在では無いは。人々箇々本具して居る佛心の妙用で。凡て天地の間に生れて居る人間に。觀自在で無いものは只の一箇も有りはせぬは」何故といふに

○咳唾掉臂終不假別人力」　「咳をするも唾をするも。臂を掉て往來するのも。他人の手を假るのでは無い。皆自己眞性の觀自在で働いて居るのじや」

○誰繫縛儞著　「だれが儞を繫縛て置くな。本來自由の眞心は。他から繫ぎ著ることも縛ることもならぬ筈のもの自ら迷つて凡夫と成て。自分の妄心で自分で縛つて。不自由なものに成て居るのじや迷ひさへ無れば各々其身軀が

其身そのまゝの觀音樣。それを知らずに他の物とばかり思つて居るのは。なんと詰らぬ事では無いか。ソコデ一とつ修行して。我見我執の迷ひを拂つて。自心本具の觀世音を。磨き出すのが肝腎要じや

○伸左手搔佛首　即非無　左の手を伸して佛の首を搔といふのじやが。其佛の首はどこに在る。此眼玉が容易には明ぬので。併し是は隨分無いことは無いが。眞に稀に在る所のもの

㊀屈右手觸狗頭　何日免得　自身で好んで手を伸すのでは無いけれども畜類にもなれば禽獸にもなる。生ながら年が年中。六道輪廻することは。迷ひの衆生の免れぬ數で有るのじや

○執捉運奔不假他　執捉は手に物を執捉こと。運奔は足で歩行こと。此手足の二つを擧て。全身の功用を悉皆こめたもの。生れるから死ぬまで。朝から晩まで。自由自在に働らいて居るが。決して他人の力を假るのでは無い。悉く自己本具の作用で有て。生れながらの本然自在。然るを

○唯因情念積多羅　多羅とは印度に多羅樹といふ木が有るので。幻術者が此多羅木を種にして。或は男に見せたり。女に見せたり。鳥獸に見せたり草花に見せたり。種々な形を現じて。人の眼を昧ますので。是を衆生の一念の迷ひが。本具の佛性を昧ます事に喩へたもの。情念とは喜怒愛樂惜い欲い憎い可愛いの妄念の事。此妄念に因るが故に。迷ひに迷ひを積重ねて。我と自由を壓制して。不自由なものに成て居るのじやといふこと

○是非憎愛總拈拋　許汝生身觀自在　拈拋ハチンジハウルと訓じて。こゝでは只拋り出して仕舞こと。是だの非だの憎いの可愛いの妄念を。根から底から總て拋り出して仕舞と。本具の佛性が現前する。其時予が許してやる其身其儘の觀音じやと。是れが白隱師が許すばかりでは無い。自ら肯つて自ら許す事が出來るので有る。さかし此講釋を聽たばかりで。我の身が觀音じやなどゝ

思つたら大差慢じや。忽ち火の車が頭上へ轉げて來るぞ。早合點をせまいぞ

菩薩

簡異二乘與十號。暫時假設菩薩名。在途中不離家舍。離家舍不在途中。爲君奪卻四弘願行。卻是君子可八

超出我空無相窠。沈浮業海生死波。

南無救苦大悲者　百億分身無際涯

㊟菩薩　提解云。具ニハ應ニ菩提薩埵ト言ベシ。菩提。華ニ道ト言フ。薩埵。華ニ心ト言フ。道心衆生ト謂フとある。又一ッの譯語に菩提を覺と云。薩埵を有情と云。覺有情といふと有る。是に三つの義が有て。一には大道心衆生と言て。大道の心を覺する衆生といふ義。二には大道成衆生と云。大道心を圓成して居る衆生といふ義。三には覺有情と云。一切衆生を濟度して覺らしめるといふ義で。是を菩薩の三義といふ。常に菩薩と稱するのは。此菩提薩埵の。提と埵の二字を略していふので有る

㊟簡異二乘與十號。暫時假設菩薩名　簡はエラム異はコトナルと訓じて。二乘と十號とに簡異にして。差別するの義じや。二乘とは聲聞緣覺の二乘で。是は小乘の行者で未佛法大乘の域には到らぬ地位で有るので。乘とは乘物の義で。其地位に居るといふ意になるので有る。或は菩薩乘佛乘などの乘も皆此意である。十號とは。こゝは佛の十號を指ので。所謂。如來。應。共。正徧知。明行足。善逝。世間解。無上士。調御丈夫。天人師。佛。世尊。等の十號で。こゝでいふ十號はすぐに佛といふことになるので有る。扨菩薩に在ては佛法大乘の眞理を證得して居る大士で有るから。二乘よりは遙かに勝れて居る所のものされども佛に對しては劣で有る。ソコデ「二乘と佛乘とに簡み異にして。假に菩薩の名を設立したものじやゝといふこと。扨是から以下の二句は。大乘菩薩の境界に付て明したもの

○在途中不離家舍　途中とは生死輪轉の衆生世界を指ので。家舍とは所謂彼岸で。生死の途中をぶつ超た本分の住所のこと。「菩薩は衆生濟度の爲めに。其身は凡夫とことを同くして。共に生死に關つて居るけれども。而かも其實心は不生不滅の本分の家舍を離れず。常に眞如、法性の土に安住して居る」といふこと。併し斯ういふたばかりでは。菩薩の腹の中に。途中の家舍のといふ。うるさい擔ぎ物が有るやうに聞えるから。ソコデ此後へ

○離家舍不在途中　常に本分に住して居るけれども。こゝが本分の家舍じやなどゝいふものは持ては居らぬ、まるで離れきつて居る。又常に生死の中に居て。而かも生死に關はらず。途中の家舍のといふものは。兎の毛ほども無いので。さらばとて一向空無ではない。天も有り地もあり。男もあり女もあり。猫も杓子も。何もかも有る一切差別の眞正中から。平等の大慈を運び出して。四弘の誓願に乘じて度生の爲めに力を盡す。是が菩薩の眞境界である。扨是でまづ菩薩の境界は豫め聞えて居るやうじやけれども。菩薩其人の腹の中は。まだ中〳〵窺えぬものが有るので。是から其窺えぬ樣子を出しかけるのじや

○爲君奪卻四弘願行卻是君子可八　四弘願行とは。所謂。衆生無邊誓願度。煩惱無盡誓願斷。法門無量誓願學。佛道無上誓願成。の此四ツの願行のこと。凡そ佛門修行する者は。僧俗共におしなへて。此誓願は必ず立る所のもの、況んや大乘の菩薩においてをや。始終此誓願に乘じて。自利利他の願行を成就されるので有る。もし此願行に少しでも缺點が有たら菩薩では無いので有る。所へ白隱禪師が「今予が君の四弘誓願を奪卻つて仕舞たらどうする。菩薩の面目が無くなつて仕舞で有う」と此一句が毒語の絶妙な所じや。菩薩の資格が無くなつてソコデ始メて菩薩の菩薩たる眞德が顯はれるので。卻是とは是で眞正の菩薩で有るといふ意味で。此卻是の二字は即ち菩薩の眞德を。世間へ照會して居るので。有る。ソコデ「予は君子可八と云ッてやらう」と妙な名をつけた。此四字は言語道斷

で講釈の仕やうはない。是が前にいふた菩薩の胴腹。窺ひ得られぬ所をゾッタリ見干た一句で有る。此君子可八の四字を俗語解には。八は仁義禮智忠信孝悌也。君子。此八ッの物を可すといふて有るが。もし斯樣な意味を擬つて見て居たら。菩薩の腸は陰除きも出來はせぬ。合て白隱和尙の胴腹も到底見ることは出來ぬ。こゝの君子可八は其樣な智量分別の充識りでおッつく理の物では無い。さらばとて言ふことは出來ぬ。色をも香をも知る人ぞ知るじや。扨是から次の四句の頌も。皆菩薩の境界を明かすので有る

㊀超出我空無相窠。沈浮業海生死波　こゝに我空と有るけれども。我空は聲聞の得る所で。聲聞は我空は得るが法空は知らぬので。菩薩は我法の二空を觀得して居るので。今こゝにいふ我空は。法空を籠て見るので有る。天も空地も空。我も空人も空。一切萬法悉く空じ盡して。眞空無相平等一枚の場所をさして。我空無相窠といふたもの。もし此場所に屈み込で仕舞ッたら。是即佛の阿する所で。

所謂鬼窟裏活計で。眞商佛性の端的では無いので有る。ソコデ此窠窟を飛出して。有じやの空じやのといふ場所を。一度眞實に超越て。始て活々とした佛性が光りを放つので。夫から自由自在の境界が顯現する。此境界の手に入て居るのが即菩薩で。こゝに至つて凡夫と等しく。業感生死の海中に遊戯して。苦樂の波に浮沈して。自由自在に行られるので有る

○南無救苦大悲者　南無とは歸命發願回向の義で有るけれども。今こゝでは只管に尊んで仰ぎ拜する心もちじや。無始以來業報の爲めに生死に沈淪して。永劫苦惱に陷つて居る造罪の衆生を。其苦穴より救ひ出して。心源を悟らしめ。安樂の佛乘に導引に付ては。衆生に代ッて衆苦を受け。凡夫と生死を共にして。利他の力を盡される人は。只此大乘の菩薩あるのみ。あら尊とや有難や。大悲者大悲者と。單へに恭敬讃歎されたので有る。其又大悲の妙行に在ては

○百億分身無際涯　神通自在の妙用を現じて。數限り無い分身の菩薩を現

出して。普く十方の衆生を救濟される。大悲無盡の方便を大に稱讃されるので有る。扨て此分身の事に就ては理學者社會では。只理もなく疑つて。其樣な事が有る物かと。誹り落す輩も有るのであるが。神通の妙理が研究して無いからのことぢや。一とつ文字屋さんに解りさうな點から。譬を取て見れば。東照宮などといふ御方が多く分身を出した御方で。三方原の戰ひなどでは。此分身が命を捨た事は夥しい事で。此外諸侯百姓町人にも。此分身を出した者は幾等も有るが。是は自ら化成した物ではなく。身軀が別々で有て。誠を盡す忠實の人等が分身に成たので。サレドモ。是とても能く〳〵其内部から押て見ると其主公一人の心から造り化せられた事は。道理に於て著しく知られるので有る扨今こゝの菩薩が神通の分身は全く自ら化成する所のもので。彼の維摩大士が香積國へ香飯を求めにやる時は。自ら分身の菩薩を化造して。是を使ひに立られたなどの類で。又觀世音の分身の事は。觀音經に委く出て居て就て見れば解ることで。又彼の源平盛衰記に出て居る遠藤盛遠を發心させた袈裟御前は觀音の化身じやといふ。是は母の刀自が言ふたことで。外には證據も何にも無いのじやが。縱ひ母の刀自が言はずとも。觀音の化身に相違無いのじやまづ是等の道理に至つては。智解情量ではおつかぬ。言句を以て傳へやうは無いので有て。全く一とつの研究ものじや。マア斯樣な事は言ずともの事では有るが。左右佛法を妄說にしたがる人が有るからして。一應斷はつて置くので有る

行

道什麼事生也。夜眠晝走。放尿屙屎行雲流水墜葉飛花。擬議三塗地獄。雖然凭麼地。非一回白汗流。親見徹大有事在。

手捉脚運惟什麼　飢餐渴飲作麼生

箇中若著一毫相　復爲渾沌剖眼睛

㊥行　は遷流義と云て。古から今日まで。天地日月の運行。世界の遷り流れてゆく貌で。即ち人間の日用行事のことじや。今こゝでは般若を行ずるの行をさすので有る

註解に云く行ノ義。別に心ヲ用ヒテ行スルニ非ず。行住坐臥一切事上。即ち深般若之行也。修行者宜く審細に觀察スベシ。苟モ我見に隨へバ。則見思ノ二惑貪瞋痴ノ三毒。皆駸駸トシテ而起。防ク可カラ不ニ至ル。之ヲ底下ノ凡夫ト謂フ。畢竟自心之本源ヲ知ラ不之弊也。若シ自心之本源ヲ知ルトキハ則決シテ我見ヲ起サ不。假令時ニ臨ンデ貪欲山ノ如ク瞋念火焔ニ似タルモ。則自佛之光明也。而ルヲ況ンヤ行住坐臥菩薩之威儀ヲ失ハ不ヲヤ也。然リ而熱世界ヲ觀照スルニ。日月星辰于天懸リ草木叢林于地列リ。士農工商ヨリ飛鳥走獸蠢動含靈ニ至ルマデ。森然雜然現在スルコト。皆是レ吾カ眼自放出スル之大光明ニ在ラ不ト云コト無シ。此ニ至テ嫌擇取捨之及バ不所也。之ヲ深般若波羅密多ヲ行スト謂フと有つて是が行の字の趣意であるのじや。白隱師の著語にも凡て此意を持ち居るので有る

㊥道什麼　「行ずるなどといふことが何處に在るぞ。般若の本體の上には。行ずるなどゝいふことは有はせぬは。それを態〻行などゝ言ひ出して。風無きに波を起すといふものぢや」

○事生也　「ソリヤコン事が起つたは」どんな事が起つた。己れが行ずると思つて居る。地獄の業が起つたのじや」

○夜眠晝走。放尿屙尿。行雲流水。墜葉飛花　「別に行などゝいひ出して何にする氣じや。夜は眠り晝は働く。雲の行くも水の流れるも。放尿するも屙尿するも。木の葉の墜るも花の散るのも。凡て無心の功用で。行ずるとも何とも思はず。其儘般若を行じて居るではないか」

○擬議三塗地獄　擬ハナズラヒ議ハハカルと訓じて意を以て擬ひ議るこ

と。三途とは火血刀の三つの街で。地獄のことじや。もし別に行ずる般若が有ると思ふたら。夫がすぐに地獄の種だぞ」

○雖然凭麼地　「しかし然は言うものは子細が有るぞ。丸呑にせまいぞ」

○非一回白汗流親見徹　「蒲團の上で大汗帶て骨に骨をつて。親しく見徹しなければ。此般若は手に入らぬぞ。麁鹵早合點すると」

○大有事在　「大ごとが出來るぞ。忽ち地獄へ陷墜だぞ」

㊀手捉脚運惟什麼　「手で物を捉り足で運く。これはなんじや。己れがすると思つて居るか。是皆般若の功用で有るぞ」

○飢餐渴飲作麼生　「腹が飢れば餐ふ渴けば飲む作麼生。眞箇無心の般若の功用。誰も彼も行じて居るではないか」

○箇中若著一毫相　箇中とは般若の體用をさすので「サア此般若の功用の中へ。もし毛一ト筋の知見が出たら。美しい本心を殺して仕舞ぞ」

○復爲渾沌鑿眼睛　是は莊子の內篇に出て居る譬喩の話しで。南海の帝を儵と云ひ北海の帝を忽と云ふ中央の帝を渾沌と云ふ。或時此儵と忽とが渾沌の所へ會合して。大さう饗應に成たので。夫から儵と忽とが相談して。ナント那樣に叮嚀な饗應に成た事だから。何ぞ酬ひを仕たいもの。夫には渾沌帝は眼鼻耳口が無くて素篦棒じやから。眼や鼻の穴を鑿てやらうではないか。夫が宜からうといふもので。夫から二人して渾沌の面へ穴を鑿はじめた。一月に一とつ宛竅を鑿て。ソコデ眼が出來鼻が出來てきたので。渾沌は大悅びで有た。覓に七日目に至つて。眼が二たつ耳が二たつ鼻の穴が二つ口がひとつ。七つの竅がスッパリ出來て。まづ是でよしと思つたら。渾沌は忽ち死んで仕舞たといふ。其儘で濟で居るものを餘けいな世話をやいて。渾沌を殺して仕舞たといふ。是が莊子の譬喩なので有る。今此話しをこゝへ取出したといふものは。元來般若は本具のもので。其まゝでよいものを。いらざる思量分別の知見を著て肝腎の本心を

埋沒して仕舞のは恰ど渾沌に眼鼻を著て殺して仕舞やうなものじゃといふこと

深般若波羅蜜多

咄。剜好肉生瘡。怪哉所謂般若其何爲物哉。既是有淺深將其似河水者乎。試道作麽生是有淺深底般若。恐有認楚鷄去

求空破色之言淺　全色見空此曰深

甕中跛鼈逐飛禽

㊗深般若波羅蜜多　般若波羅蜜多のことは前の題號の所でいふて有る。今深字を添て有るのは、廼ち觀音大士が今般若を說出されるに付て。まづ慧光三昧の定に入られて居る。此定中の蜜行が即ち行深の二字であるので。所へ白隱禪師が

㊗咄　「馬鹿ぬかせ。般若に淺いも深いもあるものか」

○剜好肉生瘡　「奇麗な美人の面へ彫刻をして。だいなし瘡を著るやうなものじゃ」

○怪哉所謂般若其何爲物哉。既是有淺深將其似河水者乎　「扨も怪しいことを聞くものかな。汝のいふ般若といふのは。いつたいどんなものじゃナ。深い般若が有るといふからは淺い般若も無ればならぬ。既に深いの淺いのといふことが有れば。般若といふものは河の水見たやうなもので御座るかな」

○試道作麽生是有淺深底般若　「ひとつ試に作麽生か其淺かつたり深かつたりする般若を。言つて見ろ」

○恐有認楚鷄去　認楚鷄とは昔し楚國の王が鳥を好まれて。多くの鳥を飼て置て珍重されるに付て。楚國の富有な商人が丹山の鳳凰を獻上したいと思ふて。方〳〵尋ね求めた所が。或人が奇麗な鳥を持て來て。是が丹山の鳳凰じ

やといふので。大金を出して之を買取て。楚王に獻上したので。楚王も大さうに悦ばれた。所が其鳥が實は丹山の鳳凰ではなくて。楚ノ國の鶏で有た。校點な商人に欺されたので有て。楚王も獻上した人も。馬鹿な目に逢たといふ古事が有るのじや「磐若々々と言ひなさるが恐らくは僞物で有うぞよ」といふこと。是は表は何方までも觀音大士に抗抵でゆくのじやが。其實は世間の學者の分別悟りを箴戒て居るので有る。扨まづ斯樣に淺深を叩き落して置て。是から次の頌へ。

學道ノ人の識見に。正しく淺深有ることを明かすので有る

(頌)求空破色之言淺　凡そ一切の色形ちは目前有るやうに見えるけれども。終には消滅して空に成て仕舞ので。ソコデ男を見ても女を見ても。鳥獸草木を見ても。凡そ見るもの〳〵につけて。今此の如く有るやうなれども。終には破壞して悉皆空に成て仕舞ふ。人は地水火風の集り物。身の暖みは火に返し。動き働きは風に返し。血だの唾だの涙などは水に返し。身體の形ちは土にかへし。四大

ばら〳〵に返して仕舞へば。全く空で。其四大も亦空に歸して仕舞

ひきよせて結べば柴の庵りにて解ればもとの野原なりけり

此意味を觀じてゆく。之を析空觀といふ。是は學者がまだ識見の淺い所の觀法で。此觀を爲し了て一段すり上がると

(○)全色見空此日深　一切の色形即其儘空と觀じるので。色即空と見るので有る

ひきよせてむすばぬとても庵りなり解ねどもとの野原なりけり

此意味を觀じてゆく。之を體空觀といふ。學者の識見の深く成た所されども

(○)若抱色空談般若甕中跛鼈逐飛禽　本來般若は非空非色なもの。それを色じやの空じやのと言て居るうちは。到底般若の本體には屆きはせぬ。恰ど甕の中の跛鼈が空を飛ぶ鳥を追欠やうとして。甕の中を匍匐まはつて居るやうなものじや」いくらじたばたしても追付ことは出來ぬのである

又是剜、好肉、了。去劫已前來劫、後。吹毛匣裏靈光寒。和盤托出夜明珠

昨晨掃却舊年煤　今夜錬磨新歳鎚

帶根松矣葉、加橘　還着新衣待客來

㊟時　提解ニ云ク時ト者親ク上來之妙義ヲ自知シタル時ヲ謂フ。小ニシテハ之レ則初生自死ニ至ルマデ深般若ヲ行スルノ時也。大ニシテハ之則無始自以來盡未來際ニ至ルマデ深般若ヲ行スルノ時也。と有る

㊟又是剜好肉了　「時なぞといふ物が何處に有る。時なぞと言て有もせぬへりきりを立るのは。又是美しい面へ剜をするといふものじや」

○去劫已前來劫後吹毛匣裏靈光寒　去劫とは過去久遠劫を略していふので。來劫も未來永劫の略言じや。吹毛は吹毛劍のことで本具の佛性を喩へたもの。匣裏は箱の内といふことで。一切衆生の身の中に本來佛性を具藏して居るといふこと「時なぞといふものが有るものか。久遠劫以前から未來際まで。突通しの眞性。箇箇身の内に在て。テカ〳〵光りを放つて居るわへ」其眞性の美しい事を言て見れば

○和盤托出夜明珠　「盤徹る玻璃の盆の上へ水晶の玉を山盛に載て托し出したやうなもの。テカ〳〵光り輝いて。其奇麗なこと美しいこと。何ともも言ひやうは無いわへ」と斯うひとつ言て置て。是からあとの頌へ時を出して見せるのじや。那いふ時じやといふと。白隱師が此毒語を書れたのは年末の事で。春に成て毒語が出來上つた。其時のことじや

㊟昨晨掃却舊年煤　「昨日大晦日の朝。院中の大掃除をして舊く溜つて居た煤、掃ひをした」

○今夜錬磨新歳餡　「今夜餡を搗て。夫を錬磨て。備餅をこしらへ。新年のしたくが出來たは」

○帯根松矣葉加橘　「根つきの松やら葉の付た橘。楪の搗栗のと正月の入用の物を集めて」

○還着新衣待客來　「取ておきの一枚看板の春衣を着かへて。年始客の來るのを待て居ることじや」と是則時といふもの前には時の無いことを示して置てごゝで又其時々の時といふことを明かしたもの

照見

爍迦羅眼絶纎埃。莫向石灰籮裏。眨眼。者裏是何所在。盡大地是沙門一隻眼。只是玄沙道底

蟭螟眼裏蟻旋磨。

蟣蝨耳中蛛結羅。

兜率閣浮泥犂獄　分明掌上庵摩羅

○照見　とは五蘊皆空の眞相を竪眼を以てゾックリと見拔事じや所へ白隱禪師が

爍迦羅眼絶纎埃　爍迦羅眼とは金剛の眼といふこと。わざ〳〵照し見るなぞといふ事が有るものか。金剛の眼は人々皆具有して居て。年が年中明らかに照して居るではないか。テカ〳〵光り輝いて居て。兎の毛程の纎い塵埃も寄せつけるものでは無いわへ」

○莫向石灰籮裏。眨眼　石灰を籮で蕩つて居る前で。眨眼をすると眼の中へ埃がはいる「わざ〳〵照し見るなどゝいふのは。石灰を蕩つて居る前で眼ばたきをするやうなもの。明らかな金剛の眼の中へ。わざ〳〵埃を入るといふものじや。其樣な事は止にして貰はう」

○者裏是何所在。盡大地是沙門一隻眼　者裏とは箇中といふことで般若の

中といふことになるのじや。何ノ所在ッとはどこに有るぞといふこと「もとより明らかな般若の中に。わざ〳〵照見るなどゝいふものが何處に有るものか」沙門とは僧侶をさしていふので有るが。實は誰にも彼にもかゝるので。眞正の竪眼の有る人といふことじや「世界中が此活潑僧の一隻眼で照し通しじや」其一隻眼はどんな眼じや

○玄沙道底　「玄沙大師が言ふた。どんなことを言たナ。誰にも解らぬ」此四字は子細が有る。實は玄沙大師にも言ふことは無いのじやから。是は講釋の仕やうはないのじや。扨又盡大地一とつの眼といふたとて大きい計りを言ふのでは無い。どんな小さな物でも照して居る「今その小さい物を出して見せやう」といふ心もちで下の頌へかゝるのじや

頌　蟭螟眼裏蟻旋磨。蟣蝨耳中蛛結羅　「蚊の睫毛の中に住つて居る蟭螟の眼の中で蟻が磨を旋つて居るのも。蟣や蝨の耳の中で蛛が羅を結つて居るのも能く見える」又

○兜率閻浮泥犂獄。分明掌上庵摩羅　兜率とは六欲天の第四の兜率天の事。閻浮は此ノ娑婆世界のこと。泥犂は地獄といふことで。此三つを擧て三界六道悉く統たもの。庵摩羅は木の名で庵摩羅菓といふ可きを七言句の事で有るから菓の一字を略したもの。此ノ庵摩羅の菓は瓜のやうな形で筋が立て居て。中の中まで透徹つて見えるものじやといふこと「此金剛の眼玉で。三界六道照しぬいて居ることは。手の掌の上の庵摩羅の菓を見るが如く。底の底まで透徹つて見えすゐて居るわへ

五蘊皆空

靈龜拽尾。爭免得其蹤。色蘊如鐵圍山。受想如金剛劍。行識如吝意寶。只知途路遠不覺又黃昏

認他色受想行識

執作自家娟媿躬

譬似浮漚留水上　或如閃電拂長空

㊍五蘊皆空　五蘊とは色受想行識の五つのもので。蘊とは積み重なるの義で。譬ば芥溜の中に塵芥が山のやうに積つて居て。其中が見えなく成て居るやうなもので。此五つのものゝ爲に本具の佛性が埋沒されて居るといふ義で有で。又或は五陰とも書て陰の字に作つたのも有る。是亦本性を覆ひ陰すの義に取たもの。扨又人間といふものは。眼耳鼻舌身意の六根を具して。自由の働きを起して居るので有るが。其働きを起す所以の物は。向ふへ立つ所の色聲香味觸法の六塵で有て。此六塵に對さなければ六根は有ても働きの起しやうは無いので。凡そ人間の六根の働く所は總統て六塵の外には無いので有る。六根六塵相對して人間が一切の功用を爲して居るのじや。ソコデ今此五蘊といふ中の最初の色といふのはあとの聲香味觸の四つを籠たもので。色の一字で色聲香味觸の五塵の事になるので有る。されば色蘊の一とつで五塵を象るので。此五

塵は即形體に屬したもの。後の受想行識の四蘊は心に屬したもので。即六塵の中の法塵といふもの。凡そ人間世界は此五蘊で成立て居るので。此五つのものを取て除れば。人間世界は無いので有る。夫故に人間界を五蘊世間ともいふて有る。然れば此五蘊といふものが。實に有る物かと推て見ると。悉く虛妄無體で。有に似て無いもの。第一に我身の色蘊が四大の集りもので。我身の四大をいち〳〵に數へ分て見ると。我身と指可き物は何方にも無い。全く無體じや。其又四大といふものも。火に火といふ意もなく。水に水といふ意はない。地大も風大も皆同じことで。其儘空じや。天に天の心なく。地に地の意なく。すべて無心の功用で。天地萬物歷然として其儘空じや。此空門から這入て見た所を眞如門といひ平等門といふ。此平等の眞體が即有差別の現相で。此有門から這入て見た所を。生滅門といひ差別門といふ。此眞如と生滅との本色がソックリ徹見された所で。始て照見五蘊皆空といふのである。扨斯う理屈はならべたものゝ。我等のい

ふ所は總て皆精妄想で。是が五蘊皆空の決して眞面目では無いので。既に前の頌にも。若抱色空談般若。壺中破甑逐飛禽といふて有て。有じやの空じやの平等の差別のといふものを攝ぎまはつて居るうちは。五蘊皆空の空の字には遠くして遠いのじや。此皆空の空の字には子細が有る。此空の字を的にして早合點をすると。トンダ大差悞な事になるぞ。すべて經文や語錄に無字や空字を遣つて有るのは理由の有る事で。迷ひの衆生といふものは只管有相に執着して。種々な苦惱を釀して。永劫輪廻の苦を受て居るので有るから。其有相の迷ひを解んが爲めに。假りに空無の二字を以て。敎へ導くので。號けて之を實方便といふ。五蘊皆空の空ノ字は。夫等とはまるで別なもので。空ノ字に拘はつては居らぬのじや。據なく眞空なぞと。眞ノ字を附ていふたりするのじやけれど。是亦文字に吊がつたらヤッパリ同じことじや。こゝは眞正に工夫に骨析て。其位地に至つて始て解るのじや

捷解ニ云。蘊ハ蘊ミ蓄フノ義。心生ズルヲ以テ妄リニ色身有リト計ス。之ヲ色蘊ト謂フ。受ハ納領ノ義。心生ズルヲ以テノ故ニ妄リニ色聲香味觸ヲ受領スト計ス。之ヲ受蘊ト謂フ。想ハ想像ノ義。行ハ遷流生滅相續不斷ノ義。識ハ含藏識也。心生ズルカ故ニ覺知スルヲ謂フ。五蘊本空也。心生ズレハ則チ五蘊有リ。心生セ不バ五蘊有ルコト無シ。然ルニ此ノ識。覺知有ルヲ認テ誤テ自心ト爲ス。則チ枷鎖ニ所謂賊ヲ認テ子ト爲スト是也(中略)色身本物ニ非ズ。喩ハ虛空ノ如シ。若ノ色身畢竟空也ト知ラハ。却テ空ニ非ズ。其ノ空也ト解スル分別モ亦止ム。此ニ至テ強テ名ヲ空ト言フ。即色即是空空即是色ト了得ス(下略)

此中の强名言空の四字は。學者の眼目ぢや。忽がせにすべからざる大事な一句じや

㊗靈龜拽尾爭免得其蹤　靈龜とはクシビなる龜といふこと。此ノ龜は不思議な通力を得て居て。海際などへ出て歩行て居ても一向其姿が人間の眼に見

えぬで有る。サレドモ尾を拽て居るので。其姿こそ見えねども。海岸の沙地へ尾の蹤が着くソコデヤッパリ人に認られる事を免れぬので有る「コレ大士よ五蘊皆空などゝ言ひ出すと。又空といふ蹤がつきますぞ」と斯うやつて置て。是から其反對に出るのじや

○色蘊如鐵圍山　鐵圍山とは世界のグルリに在る所の山で。大鐵圍山と小鐵圍と有るのじや「大士は色蘊は空じやと言はれるが。此白隱の眼から見ると。山もあれば海もあり。春は梅や櫻が咲出して。秋になると菊の花や七草が色香を競ふ。空どころでは無い。無始以來から未來永劫色香をかへぬ。其確かな事は鐵圍山の如くじや」

○受想如金剛劒　金剛劒とは何樣な堅い物でもズバリ〳〵と斷裁所の名劒じや「受蘊と想蘊とは。善惡邪正青黃赤白。何でもかでも物の見ごとに斷わけて。金剛王寶劒の如くじや。是がなんの空なもので」

○行識如如意寶　如意寶とは。如意寶珠といふ名玉の名で。此珠を以て居れば。何事も意の如くになるといふ寶玉の事「行蘊は無始以來から今日迄。日月の運行潮の差引。晝夜の代謝萬物の生々。世界の變遷。年々歲々うつり流れて。少しも滯るといふことなく。物の爲めに障へられず。又識蘊は一切萬法を含藏して。せんぐり〳〵繰出して。是亦物の爲に礙られず。思ふがまゝに自由自在にやつて居る。トント如意寶のやうなもので有は」とすべて反對に出られたのじやが。是が何處が皆空じやな。色即是空の早呑込をしたら。忽ち差過つて仕舞ぞ

○只知途路遠。不覺又黃昏　箇奴が容易には手に入らぬので。十年二十年の骨折が無れば。此眼は明ぬ「學者等も此仕事の容易ならぬ遠い事は知て居るが。其わり合に骨を折らぬ。大ていは途中で飽倦て中休をするから。いつの間にか日が昏て仕舞のである」

㊀認他色受想行識執作自家娟媿呵　他とは我が物で無いといふこと。人は

皆有心なものじやと思つて居るけれども。元來無心が生れつきなので。一切皆無心の境界であるのじや。眼に眼といふ意もなく。耳に耳といふ意もない。六根皆同じ事。見ると思はずして見。聞うと思はずして聞き。思はふと思はずして思つて居る。されば此五蘊の中に我といふものは何處にも無いのじや。而かも此主宰なきに於て強て主宰を立て我となし。虛妄無體の五蘊を認ておれが物じや〳〵と執着して。ヤレ容貌が好の嬶いのと我物顔に扱つて居るのであるが。元來我物で無いからして。決して頼にはならぬ。いつ何時も知れぬ命じや

○譬似浮漚留水上。或如閃電拂長空　五蘊の法といふものは。譬ば水の上に漚が浮て居るやうなもの。そばから〳〵消て仕舞。而かも消ぬさきから其儘水で。漚の實體は無いので有る。或は又空中へ閃電がピカリと光つたかと思ふと。刹那の間に消て仕舞。是も亦消ぬさきから空體で。此光りが何處から出たといふこともなく。何處へ引込といふこともない。其儘其處へ消て仕舞。一向たはいもない物じや

度一切苦厄

客杯弓影元非蛇。夢裏明々三世有。覺來空々大千無。
後鬼推扁前鬼拄　兩頭奮力汗通身
終霄爭拒漸天曉　堪笑元惟相識人

㊟度一切苦厄　苦はくるしみ厄は禍ひで。度は渡すの義で。苦の岸から樂の岸へ度すの意なので有る。まづ人間は如何な事が苦で有て。如何な事が樂で有るかと押て見ると。事柄の上に苦樂といふものは無いので。自心で苦と思ふから苦なので。苦と思はねば苦では無いのじや。樂も亦其通り。樂とするから樂なので。樂としなければ樂でもなんでも無いので有る。喩へば灸を居るやうなもの。身軀へ火を付るのじやから中〳〵苦で有るが。是を居れば身軀が健康にな

るといふ。安心な樂しみが主に成て居るから、灸の熱いのは少しも苦にならぬので。もし自己の健康に意の無い人が強て居られるとしたら。其熱い事苦しい事。わづか二十分間ぐらゐの忍耐が百年も立つやうに思ふので。實に苦じや。シテ見ると苦樂といふものは凡て事柄の上には無く心に有るので。迷つて居る人で見ると。我見我執の妄念で樂を求る心が強いからして。見る事聞く事皆苦になる。まづ生れるのが苦で夫から育つのが苦で學校へ通ふのも苦じや。親の言ふことを復從のも苦。雇人も亦苦で。女房を扱ふも苦なら。良人や舅姑の機嫌を取るのも苦じや。家業も苦ならば怠惰も苦じや。交際も苦なれば遊ぶも苦じや。暑いも苦なら寒いも苦。年の寄るも苦ならば病ひは尙苦で。死ぬ事はいよいよ苦じや。斯う數へ立て見ると樂といふことは一つも無いので。ソコデ此世を苦世界と言ひ娑婆世界といふ。まづ第一に苦を厭つて樂を求める此心がすぐに苦なので。是からして一切の苦しみの穴を堀ては陷堀ては陷するので有る。

其本何からといふと五蘊の法を實有と認て執着して居るからのこと。是が一切の苦惱の製造本じや。此根本が明らかになると。一切の苦惱は地を拂つて無くなつて仕舞。所以に照見五蘊皆空度一切苦厄といふので有る

客杯弓影元非蛇　是は晉書に出て居る事で。樂廣字は彥輔といふ人が有た。元南陽淸陽人で。河南といふ所の尹に成たので。或時親しい朋友が來たので。饗應をして酒を飲せた。其時朋友が杯を手に受て酒を飲ふとすると。其杯の中に小さな蛇が居たハテ蛇が居ると思つたが。主公の手前遠慮して。我慢をして其酒を飲で仕舞たのじやが。實は蛇が這入つて居たのではないので。其座敷の長押に弓が懸て有て其弓に漆で蛇の畫が描て有た。それが窟つたのである。サレド其朋友はそれとは知らず。蛇を飲だ〳〵と思ふ神經から。家に歸ると忽ち發熱して床に付たので。樂廣是を聞て其原因を悟つて氣の毒に思ひ。其朋友を復家に招ひて本の席に座らせて酒を出して。其朋友が杯を手に取た時。樂廣云、

杯中に蛇が居升かと尋ると。居ると答へた。樂廣長押を指して弓を示した。其客長押の弓を見て。始めて其畫の影なることを知たので。神經が晴れて。其病ひ忽ち愈たといふ話じや。客杯ノ弓影元ト非ル蛇ニ。五蘊の現身元ト有に非ず。然るを迷つて實と認て。自ら執着して苦しんで居るのは。恰ど夢を見て魘されて居るやうなもの

○夢裏明々三世有　浮世を夢といふに付て或人が人間世界がなんで夢なものかと言はれた事があるが決して別なものでは無い。寐て見る妄想を夢と言ひ覺て見る夢を妄想といふので何方も同じ一とつの妄想じや。自己本性の見えぬうちは。妄想を認て心じやと思つて居るので。其妄心から世の中を見るから世の中が皆妄想世界に成て仕舞ふのじや然ういふ人の世界をさして夢の世とはいふので有る。此夢といふものは無いものゝやうに思ふのであるが。寢て見て居る間は確かに有るので。山もあれば海もあり面白いこともあれば恐ろしいことも實に有るのじや。圓覺經に如夢中人夢時非無及至於醒了無所

得と有る是じや。されば現行妄想の夢の中には。善惡苦樂も過現未の三世も。三世六道も何もかも確乎有るのじや。何程死ださきは無い〳〵と張威で見ても。此身軀の有るうちは。昨日もあれば明日もある。生て居るといふものが有れば。死んでからさきといふことも有る。妄想夢中の境界で。之を夢裏明々ト三世有と言ふたもの

○覺來空々大千無　大千とは大千世界の事。此妄想の迷ひの夢が一と度眞正に覺て見ると。今迄有るやうに見えて居た大千世界が跡かたも無くなつて。常住不變の眞實の活た世界が歴々分明に現前する。是を眞如法性ノ土とも極樂世界とも言ふので有る。楞嚴經に得菩提者如寤時人說夢中事とある。又法華經に衆生見劫盡大火所燒時。我此土安穩天人常充滿。園林堂閣種々寶莊嚴とある。此眞世界の事をいふので有る。然れば此大千無の無ノ字も單に空無の事と見たら的がちがうぞ。夢中の人に覺た時のやうすは解らせやうが無いので。覺め

て見ると夢の中の事はスッパリ能く解るので。是から其樣子を頌に述られるのじや

(別)後鬼推扃前鬼拄兩頭奮力汗通身。終宵爭拒漸天曉。堪笑元惟相識人

是は龍樹菩薩の大智度論に出て在る因緣を七言四句に綴られたもの。此因緣は。或人が山中に入て日が暮たので。或家に付て宿りを求めた。其家の人がいふには。此山中には妖怪が在て。夜るになると出て來るゆゑ。止宿事は出來ぬといふ。ソコデ此男がイエ內から〆りをして這入らぬやうに仕升から何卒止宿て呉といふて。やう〳〵の事で止宿て貰つた。頓て夜が更て來ると。外から頻りに木戸を明けやうとする者が有る。扨こそ妖怪入れてはならぬと。內から固密押へて居る。後鬼推扃外からはなんでも明けやうとする。前鬼拄と內からは明けさせまいと押へて居る。兩頭奮力汗通身內外互ひに力をきはめて大汗かいて。終宵爭拒漸天曉。夜ひとよ爭ひ拒んで居るうち。終に夜が明けた。堪笑元惟相識人。夜が明けて見たら外から押たものは妖怪ではなくて。親しい朋友で有た。イヤ你で有たかワハ……と。双方大笑をしたといふ。是が龍樹菩薩の譬喩話しで。前鬼といふのが因地の修行者に喩へたもの。又は學者の勇猛心に喩るので。妄念を拂つて空にならうと。骨を折て居る樣子じや。後鬼といふのが五濁の現相煩惱妄想に喩へたもの。只管心を澄さうと思ふとそばから妄念が起つて。修行心を搔亂す。所をなんでも追拂ふとする。妄想は頻りに涌て出る。大汗かいて爭ひ拒んで。終に天曉とは忽然と悟の開けた所で。サア妄想の夢が覺て見ると。妖怪だと思つた煩惱妄想は。眞性の親友で有て。厭ふべき物でもなんでも無つた。こゝで始て自己の眞實が顯現して。呵々大笑するに至るので有る。是が卽度一切苦厄の仕事で有るのじや。扨是迄の本文が觀音大士が慧光三昧の定中の趣きで。是からさきが觀音大士の說法で有る

舍利子

咄。小果尊者有什麽長處。者裏佛祖乞命。內秘外現著何處。淨名
室內不能轉女身。七狂八顚忘却麽

智是祇園第一枝　　驚奔長爪托胎時
親參大士留此典　　羅睺敎師鶩女兒

(本)舍利子　舍利とは舍利弗の母の名で。舍利子とは舍利女の子といふこと。
舍利は梵語で本鳥の名で。飜譯して鶖鷺鳥といふ。此母聰慧にして辯辯滯りな
く。舍利鳥に似て居るを以て號けたもの。故に又鶖子ともいふのである。今こゝ
に舍利子といふは。觀音大士が舍利弗を喚かける辭で。舍利弗は此會の發起者
である故。まづ其名を喚かけて。而かして法を說き興されるので有る

(本)咄　「なんの此馬鹿め」と舍利弗を叩き落したのじや

○小果尊者有什麽長處　小果とは聲聞のこと。大乘の大果に對して小果と
いふ。尊者とは佛法の上首に居る人を尊んでいふ稱號で有る。今舍利弗は聲聞

の人で有る故に。小果尊者と喚かけたもの。しかし是には謂れの有ることで。佛
弟子の中でも。十大弟子等に至つては。皆大菩薩の位に至つて居るので。而かも
舍利弗は十大弟子の中の一人で有て。實は菩薩で有るのじや。然れども諸方の
佛國の菩薩等へ對して。此娑婆世界の佛弟子は。凡て皆聲聞の資格で居るので
有る。是を內秘外現と云ふ。內に菩薩の德を秘して外に聲聞の形を現して。其爲
す所言ふ所すべて聲聞の位地に立て。佛に訶られたり維摩に衝かれたりして。
佛や維摩の言敎を末世に流通しやうといふ爲人の悲心に出るので有て。一切
の經文は皆此心して看るべきで有るのじや。ソコデ今白隱師が外現の聲聞扱
ひにして。わざと叩き落すので「此馬鹿めたかゞ聲聞の分際で何程の事が有る
ものか」と斯う一とつやつたものじや

○者裏佛祖乞命內秘外現著何處　者裏とは此般若心經を指ので「此活た
心經に對つては佛祖と雖も喪身失命で。面出しも出來るものではない。何卒命

斗りは助けて呉と言ふで有う。聲聞なんぞが出て來たとて徒目なことじや。内秘外現が何になるもので」

○淨名室内不能轉女身。七狂八顛忘却座　淨名とは維摩大士のこと。維摩の室内に神通不思議の天女が居て。此天女の爲に舍利弗の身軀を女身にされて仕舞た。舍利弗驚いて本の男身に成らうとしても自分の力で男に轉ることが出來ないので。大に狼狽した事が。維摩經に出て在るので。コレ舍利弗傳は淨名の室内で女にされて。もとの男身に轉る事が出來ず。七顛八倒したではないか。それを忘れたか」と此句の中に内秘外現を說て居るのでこゝらが毒語の妙味で有るのじや。是から次の頌で舍利弗の眞德を明かすので有る

㊀智是祇園第一枝　祇園とは祇園精舍のことで。釋迦如來の道場を指ので。其佛の道場に有る大勢の佛弟子の中で。スグリ擧た大德が十人有る。其を十大弟子といふ。此十人各々長處が有て。舍利弗は般若の智德に明達した人で。智慧第一と稱されたので有る

○驚奔長爪托胎時　長爪は舍利弗の兄の名で。此人都の學校に修學して。竟に卒業して。家に歸つて來た時。恰ど其母が舍利弗を懷姙して居た時で有た。長爪が卒業して來たといふので。母親が學理のことを種々に詰問れた。長爪竟に辭屈して答る事が出來なんだ。此時長爪心に思ふに。胎内の子の怜利なる時は其母をして怜利に爲といふ。此子出胎の後。必天下の器とならん。如何成弟が出來るも知れぬと大に驚いて再び都へ立戻つて。學問に從事し。晝夜勉强して。其修行中爪を剪る事をも忘れて修學したので。常に爪が長く生て居た其からして其名を長爪梵子と稱されたので有る。此舍利弗母の胎内に在て其兄長爪を驚かし奔らせたので。托胎のうちから此の如き德を顯はしたので有る

○親參大士留此典　親參大士とは。舍利弗が發起者と爲て。觀音大士の此心經を說しめたといふこと。如此の明效を末世に留て。普く功德を及ぼしたい

ふものは。是單に舍利弗の大悲の功績に之因るので有るといふこと

⊙羅睺敎師鷲女兒　世尊が多くの御弟子の中から舍利弗を御撰なされて御子の羅睺羅尊者を御預なされて。敎導の任を命ぜられたので「羅睺羅の爲には敎師なり。其母はといへば聰慧能辯の鷲女の產所。實に尊ぶべき尊者で有る」といふこと

色不異空空不異色

好一釜羹被兩顆鼠糞汚却美食不當飽人喫拂波求水波是水

色不遮空空體色　空非破色色身空

色空不二法門裡　跛鼈拂眉立晩風

㊗色不異空空不異色　とは目前の天地萬物歷々分明に羅列して居るけれども。其色形が此大虛空と少しも異つたものでは無いといふ事サレトモ色不異空と計り云時は。學者が誤解して空見に落てはならぬと。其下へ空不異色と打かへして。空で無い事を示したもの

提解云色ト者。色身自聲香味觸法ニ至ルマデ。都テ之ヲ管轄ス。空ト者。無相也。一之句言ハ。色相ヲ消盡シテ而後無相ナルニ非ス。色上直ニ相ヲ見不ル也。然モ如是ナリト雖モ若シ人此妙理ヲ識得スレバ恐クハ空ニ著シテ萬事ヲ空ゼン。遂ニ五倫之法ヲ毀チ五常之道ヲ亂スニ至ラン。故ニ二之句言ハ。無相之上全ク空ニ非ス。直ニ皆色也。天ハ是レ天。地ハ是レ地。山ハ是レ山。水ハ是水。君ハ是君。父ハ是父。臣子兄弟ハ是臣子兄弟。及事事物物自虛空界ニ至ルマデ。悉實相ニ非スト云コト眞シ。已有る。此虛空界ニ至ルの四字は。實に大慈の溢れて居る四字で。凡そ坐禪辨道する者は確と眼を着べき緊要な一句である

㊗好一釜羹被兩顆鼠糞汚却　「色だの空だの入らぬことを言ひ出して節角清淨な法心へ疵を付るといふもの。二十五采の料理の中へ鼠の糞が二顆落入

たやうなもの。喰はれたものでは無いわへ」

○美食不當飽人喫　如何成好美食物でも腹の飽い時は喰たく思はぬといふこと「其樣な物は予は喰飽て居るは。予の前で其樣な入らぬことは言て貰うまい」

○拂波求水波是水　「波を拂つて水を求めやうとしても。波の外に水は無い。色も空も一とつものじやといふ事は初手から知れた事じやわへ」と言うて置て是から本文の意を述るのじや

㊀色不遮空空體色　色が空を遮るといふのは眼が眼を見るといふも同じ事で。右の手が右の手を遮ることは出來ぬ。色が即ち空じやから。外に對待するものは無いといふこと

○空非破色色身空　空が色を破壞して空にするのでは無い。色身が空であるので。空が空の破りやうは無いといふこと

○色空不二法門裡　師の說に。色空不二と言ひ斷ては穩かで無い。此、不二はヤハリ不異の意に見て。不二の二字は輕く見て置くがよいと言はれた「色空不異の法門の裡は。どんなものじや。今予が不異の實體を出して見せやう」といふ氣味あひで

○跛鼈拂眉立晚風　「跛鼈が眉毛を作つて化裝をして夕風に吹れながら妻しや倆に盛りつぶされ餘りつらさの醉醒し風に吹れて居るわいナア」といふ按排にやつて居るのじや

色即是空。空即是色

是何間家具。毋教猱升木。又是二千年滯貨。釣絲絞水。謝郎舟

黃鳥風微希皷瑟　紅桃日暖薄籠煙

蛾眉蠕首一群女　各戴花枝錦繡肩

㊙色即是空空即是色　是は上の句を一層手近く言たものじや。色といふと誰にも解つて居るやうじやけれども。大燈國師の歌に

顯はれて鏡に物は寫れども中〳〵色はわからざりけり

此色がわからぬうちは。空を見るのも本色では無い。前にも言ふた通り。比べて空の字には子細が有る。早呑込をしてはならぬぞ

○是何間家具　間家具とは遣ひ道の無い間な器といふことで古道具といふことになるのじや「色即空なぞといふ其樣古道具は見たくも無いわへ」

○毋敎猱升木　猱は木に升ることは得手で有るのじや「猱に對して木にのぼることを敎へたとて。一向つまらぬ。此予なぞは。色即是空ぐらゐな事は疾に知つて居るは。予の前でそんなつまらぬ事を言ふのは止めて貰はう」

○又是二千年滯貨　滯貨は店ざらしの古道具といふこと。其樣な店晒物を何處から持て來た。誰も買人はござらぬわへ」

○釣絲絞水謝郎舟　「玄かし此古道具は八萬の大乘も價直の仕やうが有るまい。買人が無いから店ざらしに成て居るのである」釣絲絞の七字は前の洗羅密多の著語に出て居ることで「玄沙あたりの腕前で無れば迚も買事は出來まい」是から次の頌の四句は色即是空の端的を暴出して見せるのである

㊙黃鳥風微希皷瑟　春の温和な日和に鶯がソヨ〳〵と風に吹れて。皷瑟はホウホケキヤウと啼づるやうじや。それが決して啼つゞけには啼ず希に一聲チヨイと聞える

㊙紅桃日暖薄籠煙　桃の花などが紅ゐに咲き亂れて。薄つすら煙をこめ何とも云へぬ趣きが有て

○蛾眉蠬首一群女。各戴花枝錦繡肩　蛾眉カヒコの兩方が細く奇麗なこと。蠬首はアキツムシの首の細いことで。蛾のやうな美しい眉毛に。蠬のやうな細い首筋といふことで。美人を形容した詞で其うつくしい眉に首筋のほつそ

りごした一群の美人等が各々花の枝を簪にして錦の繡した衣裳を肩に着て。互ひに打解て遊歩して居る。優に嫋しい樣子がら。ア、奇麗なものじや」といふ按排になつたものは是がどこが色即是空の端的で有うか。まづ色空の二たつから見干てかゝるのが肝腎じや

受想行識亦復如是

荒草裏横身見怪不怪其怪自壞雪佛日出後一塲慘憺我者裏
不見者般奇怪物

地水火風飛禽跡　色受想行眼裏花
石女擲梭張瘦臂　泥牛蹴浪皷瞋牙

㊍受想行識亦復如是　と前を受ていふので。受即是空。空即是受。想即是空空即是想。行即是空空即是行。識即是空空即是識といふべきを。如是の二字で統たもの。是で前の五蘊皆空の義を結ぶので有る

㊍荒草裏横身　「色空だけでも煩惱邪魔なものと思ふのに。又受想行識なぞと餘けいなことを云ヒ出して。むさ〳〵しいはへ。荒た草叢の中に轉がつて。泥塗れに成て居るので見ッともないはへ」

○見怪不怪其怪自壞　「予の所には。受想行識の空のといふ。そんなものは有はせぬ。有もせぬものを拵へ出して怪しい事を云ヒ出したものじや。まかし初から知れきつて居ることじやから。予の方ではなんとも思はぬ。備の說は備の說で自分手に壞れて仕舞は」

雪佛日出後一塲慘憺　恰かも雪佛が云ヒ出すのは恰ど雪佛が日光に逢て解け出したやうなもの。面も身軀も崩れかゝつて。イヤハヤ見られたさまでは無い。大恥かきじや」慘憺は恥かきといふこと

○我者裏不見者般奇怪物　「予の所には。そんな怪しいものは一とつもない

はへ」と斯ういふて置て。是から五蘊の本色を出すのじや

○地風水火飛禽跡。色受想行眼裏花　地水火風は天地に在ては四大といひ。人の身に在るを四微といふ。飛禽跡とは。何にも無いといふこと。眼裏花とは。自分で眼を捻つて向ふを見ると。紫色の玉が見える。もと無いもので有るけれども消ないうちは見えて居る。是を空華とも亦第二の月ともいふ「地水火風も色受想行識も。故らに皆空など〻照し見るには及ばぬこと。元よりして跡かたも無いものじや」

○石女擲梭張。瘦臂泥牛蹴浪皷。瞋牙　梭は機織道具のヲサのことで。擲梭とは機を織て居るといふこと。石で造つた女が瘦臂を張て機を織て居ると。又泥で拵造た牛が瞋の牙を皷して大浪小浪を蹴かへして游泳で居るは。サア是が皆空の眞面目じや篤りと見るがよい」といふ按排にやられたのじや

舍利子是諸法空相

捏目強生花。從來無諸法何求空相淨地上撒屙

山河大地蜃樓涌　地獄天堂海市開

淨邦穢土龜毛筆　生死涅槃兎角杖

㊟舍利子是諸法空相　舍利子と又舍利弗を呼かけて。諸法とは六根六塵六識の十八界の法のことで。天地世界中一切の萬法をさすので有る。諸法空相とは五蘊十八界一切萬法の相は皆空相で有るといふこと。空は即ち眞空で。通常の空では無い。ソコデ著語に通常の空見を破るのじや

㊟捏目強生花　「諸法じやの空じやのと。入らぬことを云出して。わざ〻自ら目を捏つて有もせぬ空華を生じて見て居るやうなものじや」

○從來無諸法何求空相　「本來眞如實相の上には。諸法といふものも有はせぬ諸法を呼視で且へに又空相を求めて何にする氣じや」

○淨地上撒屙　本來實相といふ名も無いのじやけれども。何とか名を立ね

ば知らせやうが無い。ソコデ據なく假りに實相の名を立て置くので。今こゝにいふ淨地とは即ち實相の事じや。元來名も無く相もなく。其儘で滿足して居るものを。諸法じやの空相じやのと名相を塗りこくるのは。なんの事はない奇麗に掃除の出來て居る清淨な地へ小便を撒すやうなものぢや。

㊀山河大地蜃樓涌。地獄天堂海市開

蜃樓とは蜃蛤が氣を吐くとかいふて。遠くから見ると海中へ樓閣が涌たやうに見えるので有て。側へ往て見ると何にも無いのぢや。海市といふのも同じやうな事で。遠くから見ると海の中に市が立て居るやうに見えるが。實は蛤が氣を吐くのじやとかいふ事で。近づいて見ると何にも無いので。今目前の山河大地も地獄天堂のといふ三界六道も。恰ど蜃樓や海市のやうなもので。有るやうに見えるけれども。實は有るのでもなんでも無いのじや

○淨邦穢土龜毛筆。生死涅槃兎角杖

淨邦とは極樂の事で穢土とは娑婆世界の事。龜毛筆とは龜の毛で造つた筆といふこと。龜に毛の有る龜は無いのじやから其毛で造つた筆の有るわけが無いので。兎角杖も同じ事で。兎に角は無いのじやから其角で造つた杖はもとより無いので。極樂淨土も娑婆世界も生死も涅槃も。正眼に見來れば悉く皆空相で有るといふこと此眞相が判然見えれば。地ごくも極樂も生死も涅槃も。有るの無いのと穿鑿は入らぬ。悉く皆眞如の實相で有るのじや

不生不滅不垢不淨不增不減

可愍新鮮。果凭麽否。何計諸法不生不滅。無謾人好。手臂不向外。

曲

眼裏童子期客出　谷神不死待人呼

衆生界畔不汚染　諸佛土中淨相無

分八萬門何缺少　容三千刹若隣虛
邯鄲枕上新尊貴　又入南柯納稅租

○不生不滅不垢不淨不增不減　前の一切諸法即十八界の法を指ので有る。

此十八界の一切諸法は生じもせず滅しもせず。垢れもせねば淨みもせぬ。增もせず。減りもせず。其儘常住不變の眞相じやといふこと揽解云妄念之計較を絕スルトキハ。相即無相也。何ソ淨穢增減之見ヲ生セン乎。中略著衣喫飯屙尿送尿之上直是不生不滅也。と有るこゝらは少し解り難い所で有るが。實に此通りのもので有るのじや

㊟可愍新鮮　新鮮は新らしいといふこと。是は珍らしい事を承はるものかな。目前生れたり死だりして居るものが。不生不滅とは不思議なことじや。と是は少し嘲弄する氣味合でやつたのじや

○果凭麽否何計諸法不生不滅　「眞正に然でござるかな。一切諸法が不生不滅とは思ひもよらぬことでござるわへ」

○無謂人好　「一切諸法は昔しから今に至るまで。出來たり無くなつたり出來たり無くなつたりして居るではないか。人を馬鹿にして貰うまい」

○手臂不向外曲　「生れたものは死ぬのが當然。出來た物は無くなるがあたりまへ。手の臂は外へは曲らぬわへ」

㊟眼裏童子期客出　眼裏童子とは眸子のことで眸子は元來無心なものじやが。向ふへ物が對すると不思議な功用を起して來る

○谷神不死待人呼　谷神不死は老子經に出て在る語で。谷神とは山彥のこと山彥といふものは常はまるで無いものじやけれども。人が呼と何時でも聲を發する。決して死ない活ものじや

有と云へば有とや人の思ふらん問へば答ふる山彥の聲
無と云へば無とや人の思ふらん答人もなき山彥の聲

こゝではそを般若の眞體に擬たので。此二句は本文の最初の不生不滅を頌したもの

○衆生界畔不汚染諸佛土中淨相無　界畔は二字ともにカギリといふこと。佛界へ對して分界していふので有る。衆生界といふたとて元來汚に染るものではない。又佛界といふたとて。別に淨ひものでもなんでもない。此二句本文の二句目の不垢不淨を頌したのじや

○分八萬門何缺少　こゝは煩惱即菩提を明すので。佛性の中にばかりは八萬四千の法門が有るのでは無い。一切衆生の煩惱の中にも。八萬四千の法門を具して。少しも缺目の不足はないは」

○容三千刹如隣虛　隣虛とは空中の微塵に隣ると云て。極々小さい事をいふので。刹はクニといふ事で。佛國をさすのである。三千の佛國といふても。芥子一粒の中へも這入て仕舞ので。般若の眞眼から見るときは。蚤の陰囊ほどのも

のも無いわへ」と此二句は本文三句目の不增不減にあてたもの

○邯鄲枕上新尊貴　是は盧生の古事を擧たもので。蜀の國の人で盧生といふ學士が。及第の爲めに都へ上る途中。邯鄲といふ里で。飯食をする時。其處の家で粟飯を炊て呉れた。其飯の出來る間枕について晝寢をした。其夢に新たに尊貴の身と成て。五十年の榮花を極めた夢を見た。覺て見たら僅かに粟の飯の炊る間だの事で有た。これに依て大に悟る所が有て。凡欲を離れ及第の志を斷て。其儘古鄕へ歸つたといふ

○又入南柯納稅租　是も一とつの夢の古事で。廣陵といふ所に居た淳于棼といふ人が。夢に槐安國に入て。其處の國王の女と婚して。南柯といふ地に封せられて。其地の領主と成て一時榮花の身と成たら。其後怨敵の災ひに逢て。其地を立退くといふ段に至つて眼が覺た。覺て見ると榮花も災ひも皆夢で有たので。納稅租といふは。領主に成たといふことじや。此二句は只夢といふことを擧

て來たので。本來不生不滅の眞身で有るけれども。知らぬが故に夢中になるので。夢の中は夢では無い。榮花も災ひも確かに有て。夢から夢と轉展して。永劫生死に浮沈して。自ら苦しんで居るのじやといふこと。此二句の中には。盧生や淳于棼のやうに。早く妄想の夢を覺して。本來の法身を徹見して。安心の身となれよといふ意味をも含まれたもので有る

是故空中

狐窠鬼窟陷墜多少行人。湛々黑暗深坑。誠可怖畏

凍餒百餘僧鳳凰　各展臘扇賀新陽
壁懸碧目紫髯老　瓶入氷肌玉骨芳
寒鎖琴唇黃鳥口　暖浮禪榻赤麟育
編茅包贈自然蕉　封圈寄來養老糖

㊟是故空中　此空の字も前にいふた通り子細の有る字じやからまづは假りに眞の字に見て置くが宜からうと思はれるので有る

提解云實相妙理諸ヲ掌ヲ示スガ如シ。冷暖自知スルトキハ則全ク見聞覺知ヲ斷ジテ而無礙自在也。此妙處ヲ假ニ且空ト名ル也と有る。是より以下の空の字も凡て皆此の意で見るので有る

㊟狐窠鬼窟陷墜多少行人　狐窠は狐の潜窠の事。大燈國師の歌に　四十まで我れも狐の穴に住む。今化される人も理り

と有る此狐窠じや。鬼窟は死人を埋る穴の事。陷墜は落し入れること。ナンジャ空中じやと。それは狐窠死人窟といふものじや。そんな穴を堀て置くから。多くの學人がみんな陷込で仕舞のじや。空なぞといふことは聞たくも無い止にして貰はう」

○湛々黑暗深坑誠可怖畏　此一句は臨濟大師の語で。黑暗の湛て居る深

坑といふことで。學者の空見を訶したもの。學人一と度此空見に陷墜るときは。天地も無く世界も無く。父も無く君も無いものに成て神佛を蔑如にし。人倫を破壞し。あたり眞黑何もかも見えなくなる。此穴へ落込だら容易に出ることは出來ぬ。誠可怖畏「ヲ、怖やの畏やの」とやつて置て。是から次へ眞空の境界を顯すので有る

(四)凍餒百餘僧鳳凰　凍餒はコゞエウエルこと。僧鳳凰は骨打て修行して居る衲僧等を美稱していふので。松蔭寺の近傍に安居して。白隱師の拳槌を受けて。骨に骨を折て居る修行堅固の大衆たちが

○各展臘扇賀新陽　臘扇とは臘月の扇で不用なものと云義で。無功用の境界と表する事になるので。各々去年の中に貯へて有る扇を年玉として。予の所へ年禮に來る」とは大衆が骨折て修得した所の無功用の境界で出て來ると云ふ意味になるのじや

○壁懸碧目紫髯老瓶入氷肌玉骨芳　碧目は青眼玉紫髯は美しい髯といふことで達摩大師の事になるので。瓶は花押氷肌に玉の骨は梅の花の異名で「ソコデ此方でも壁には達摩大師の畫像を懸て芳しい梅の一枝を瓶に投入て。年始客の待遇に具へ」

○寒鎖琴唇黃鳥口暖浮禪榻赤麟盲　琴唇は鶯がホウホケキャウと啼づる唇のこと黃鳥は鶯の異名で。禪榻は禪堂の單の事になるのじやけれども。こゝではたゞ禪寺の院內のことになるのじや。赤麟盲は炭火の眞赤に發つた所を形容した詞で「春には成てもまだ寒いので鶯も音を立てず。さかし堂內の爐へ炭火が煥々く發して有るから來る人の爲には暖かにして有るは」

○編茅包贈自然蒲封圈寄來養老糖　編茅は苞の事。自然蒲は自然薯の事。封圈は封じた圈もので。養老糖は砂糖漬じや。近所の人等は苞に包んだ自然薯を進物に贈つて呉る。又遠國からは封印した曲物入りの砂糖漬を贈つて來るは」

此八句は眞の無功用の狀態を明かしたもの。どこが無功用じや苟と解らぬ

無色無受想行識

夢幻空花何勞把捉得失是非須放過事起叮嚀用空無去爲什麼

寥廓虛凝寂滅場　山河大地只是名

開心爲四合色一　心色從來空谷聲

㊟無色無受想行識　五蘊の法は目前確に有るので有るが。眞空の中には正しく無いといふこと。然らば五蘊の有る所と眞空の場所と。二つ有るかといふとさうでは無い

提解云。此ノ人眼ニ翳無シ。故ニ眞空ノ中。何ヲ指シテ色受想行識ト爲ン。何ヲ指シテ眼耳鼻舌身意ト爲ン。何ヲ指シテ色聲香味觸法ト爲ン。又何ヲ指シテ眼界乃至意識界ト爲ン。一說ニ讀ヲ改メテ。無之色無之受無之想無之行無之識ト讀ム下文之ニ倣ヘト是レ明。讀也。無者非生非滅ヲ指ス。按スルニ未タ必ス讀ヲ改メズ。宜シク是ノ如クノ句讀之意ヲ以テ之ヲ解スベシと云はれて有て。是で能く解るので有るけれども。解らぬうちは解らぬので。此掛合は口から耳へ傳へ得ることは出來ぬので有る

㊟夢幻空花何勞把捉　夢幻も空花も皆有に似て無いもの。把捉はトリトラヘルと訓じて。何勞把捉とは取に足らぬといふこと。色受想行識はもとより無いもの。夢幻空花の如きもので取に足らぬ物じやハ」

○得失是非須放過　「世界といふものは得失是非で立て居るので。是亦夢幻空花の如きもの。此得失是非を放過して仕舞へば。世界といふものは有はせぬ。觀音大士の云はれる如く。實に其通りじや。」とこゝは一とつ同意を表して置て。然で有るけれどもといふ按排に後の句を起すのじや

○事起叮嚀用空無去爲什麼　「もとより無いものをわざ〳〵無いといふには及ばぬ。餘り叮嚀すぎると事が出來るぞ。無い物の無くしやうは有まい。空じやの無じやのと名を付て何にする氣じや」

○寥廓虛凝寂滅場山河大地只是名　寥はシヅカ廓はカラリといふ義で。鎭りかへつてからりッとしたこと。虛はカラッポのこと凝はコルと訓字じやが。物の凝固まる意では無い。何にも無い無一物の中に無一物なるものが一とつ有るといふことじや。世界中寂りかへつて何にも滅場へ天の地の山の河のと名が付て有るばかり。其名を取て仕舞と本來山も河も何にも無い寂滅の道場じや

○開心爲四合色一心色從來空谷聲　開心とは一心の動作を開き分れば といふ事。四とは受想行識の四つで。唯一の心の功用を分開すれば四つとなる。色とは五蘊の初めの一とつで。即ち色聲香味觸の五塵のこと。受想行識の四つは心に屬し。色の五塵は色身に屬したもの。合色一とは。山河大地色身等の五塵の法も。後の四蘊に合一すれば只一心に歸するので。唯有一乘法無二亦無三。只一眞如の當體じや。心色とは心法と色法といふことでヤッパリ五蘊の法のこと。空谷は山彥のこと。心の色のと名はあれど。君は深野の寒蛩聲はすれども姿は見えず。山彥のやうなものじや」

無眼耳鼻舌身意。無色聲香味觸法。無眼界乃至無意識界

有眼耳鼻舌身意。有色聲香味觸法。秋天曠野行人斷。馬首西來知是誰

六識讒生六境浮　意根休處六塵休

根境識爲十八界　譬如滄溟發一漚

㊟無眼耳鼻舌身意……意識界　六根六塵六識の十八界のことで。凡そ

人間の動作といふものは此十八種の外には無いので。故に是を界といふ。界は因の義で。此十八互ひに因となる故に界といふ。また種族の義がある。根境識の三つそれ〳〵一種の族である故に。又分界の義も有るのである。眼界とは眼識のこと。乃至は耳識鼻識舌識身識を略したので。本來眞空の中には十八界といふものも無いといふこと。是も前の提解に在た通り。無眼無耳無鼻舌身意。無色無聲香味觸法。無眼界乃至無意識界と。此句讀の意で解してゆくが善のである

※有眼耳鼻舌身意。有色聲香味觸法　「儞は無いと云はれるが。眼でも耳でも鼻でも舌でも此通り有るではないか。然いふ儞が此心經を其舌で說て居るでは無いか。なんの無いことが有るもので人を馬鹿にして貰ひますまい」とやつた。此著語で前の本文が活て來るのじや

○秋天曠野行人斷。馬首西來知是誰　此二句は唐詩選に出である句じや「至極靜かな秋の夕暮。曠々とした野原へ出た所が。往來の人もサッパリ時絕て。四方八方何にも見えぬ淋しい折から。西の方から馬に乘て來る者が有が。誰で有うか。知人が有かな容易には知れまい。予は知て居るが」といふ按排じや。天地も世界も何にもない本來無一物の眞相中。馬首西來知是誰。是が白隱和尙の品玉じや

㊀六識譏生六境浮　本來無一物の眞中へ眼に物が對すると直は眼識がチョイト動き出す聲が耳に對すると忽ち耳識が働き出して。六塵の境界が起つて來る

○意根休處六塵休　眼耳鼻舌身の前五識は。其本第六意識が加はつて働くので有から。此意識が休んで仕舞と。色聲等の六塵はもとより空相。虛空の樂屋へ這入て居るから。六つの境界ソックリ休業で。何もかも無くなつて仕舞

○根境識爲十八界　境は六境で六塵といふも同じこと。第六意識が動き出すと。六根共に働いて。ソコデ根境識の十八界が成立して來るので有る

○譬如滄溟發一漚　「十八界となる時は。山河大地一時に起つて。天地世界が顯現して來るので有るが。正眼に看來れば。大海の中へ一粒の漚が出來たやうなものなんでも無いはへ」

無無明亦無無明盡乃至無老死亦無老死盡

紫羅帳裏撒眞珠。破布囊裏眞珠。知者正知是寶。牛飲水成乳。蛇飲水成毒。五雲常擁人不到。蕭索仙家十二樓

十二緣生十二滅　生名凡夫滅聖人

此維獨覺所觀境　空裏浮飛眼裏塵

眼裏飛塵誰見得　可貴圓頓大法輪

法輪影裏親薦取　超過疥癩野干身

㊟無無明亦無無明盡……老死盡　此一段は十二因緣を擧たもので。十二因緣といふことは。緣覺乘の修行する所のもの此の文には始と終を擧て。間の數字を略して乃至の二字へこめたもの。十二因緣とは具さに云へば。無明。行。識。名色。六入。觸。受。愛。取。有。生。老死。この十二で。緣覺は此十二の因緣を觀じて悟るので有て。まづ最初の

無明とは。是が人間の迷ひの根本で。凡そ人と形を受て生れる者は。皆明らかな佛心を具して生れて居るので。實は生れながら佛で有るのじや。夫故に衆生本來成佛とも。草木國土悉皆成佛とも云て有るので。然るに此明らな佛心へ。無明といふ眠りが着て。是が爲に佛心を味まし自ら凡夫と成て。生死流轉の苦を受て居るので有る。扨此無明といふものは。何時が始といふことも無いので是を無始の無明といふ。無始以來からの眠りで有て。即ち生死に沈淪して六道を輪廻するのも。八萬四千の煩惱が日々夜々に涌て出るのも。皆此無明から起るので。無明の勢力は中〳〵剛强なもの。サレドモ無明といふ物が別に一物有るの

では無い。無明即佛心で。無明と佛性とは一とつもの。佛性の味んで居るのを無明といひ無明の明るく成たのが即佛心で故に之を眠りといふ

提解云明ト無明與ハ唯自知スルト自知セ不ル與之分界也。若シ直下ニ冷暖自知セバ。則無明ノ心即明心也。無明盡テ而明ト爲ルニ非ズ。只是無明ノ當體全ク一物無シ。之ヲ名ケテ明ト曰フ也。然リト雖モ之ヲ知ラ不レバ毫釐之差ト千里之失ト爲ル。之ヲ喩ヘバ。君ノ臣ニ命ズルニ一ノ大事ヲ以テシ。剋スルニ時日ヲ以ス。若シ臣忘却シテ而君言調ハ不レバ。必嚴科ニ處ス。是レ別ニ忘却之惡心有ルニ非ズ。只忘却而已。而シテ其害ヲ釀スコト是ノ如ク其甚シ矣

と有る。無始の昔しフイと眠つて本心を忘却した。別に忘却に意が有るのでは無い。只是忘却のみ。此忘却即ち無明じや。凡そ一切の惡業皆此無明から造るので。八寒八熱の地獄の苦患も亦此無明が釀すので。今此十二因緣もすべて無明から成立つて居るので有て。十二因緣一とつ〳〵に皆此無明は係つて居るので

有る。東嶺禪師云無明トハ謂ル衆生ノ根本ヲ指ス。其體眞ニ似テ湛然凝寂ナルモ明智無キガ故ニ名ケテ無明ト曰フ。迷フトキハ即煩惱妄心トナル。悟ルトキハ即根本種智トナル。學者其凝寂ノ相ヲ認取シテ錯テ眞性ト爲ル者是也とある。こゝを明了にするのが座禪の仕事じや。夫から第二を行といふ

行とは遷流の貌と有て。此では重に造業の義に係るのじや。無明の爲に妄りに腹の中へ我といふ主宰を立てる。是を妄我といふ。此妄我からして。善惡の妄念を生じ。種々の惡念を起して。念〻相續して止むこと無き。是則未來世の果報の因となる所のもの。是を第二の行支といふ。此無明と行との二支は。過去の因で有て。是から現在に度るので。第三を識といふ

識とは。其體は佛性で有るけれども。無明の眠りの着て居るうちを。梵語に阿賴耶識とふい翻譯して含藏識といふ。又心識ともいふて。六塵の諸法を覺知し含藏する所のもの。此識。過去世に造る所の善惡の業を收藏して。現在の生緣を結

び。而して現在の生を受るので有る。故に此識は現在の支に並べ入れて有れども。實には過去現在の二世に度るので有る。第四を名色といふ

名色とは名は心のこと。心は名有て形の無いもの故。號て名といふ。色は形色のことなれども。こゝは胎内に凝結てまだ五七日程の間の事で。形相の調はぬうちのことゆゑ。形をいはずして只色といふ。身軀となるべき物が初めて固成たといふこと。夫には又中有に在て。受可き生の父母を緣して托胎するといふ謂れも有るので。或は又托胎の心のみ有て。未だ身體の具はらぬ故に名色と號るといふ解も有る。第五に

六入又は六處といふ。胎内に在て月日が重り。漸く六根の形を具した位で。是は托胎七七日程を經過した所じやといふこと。第六に

觸とはいよ〳〵月滿て出胎した位で自の六根が初めて外の六塵に觸るので。熱い冷たいを覺えることは覺えるけれども暑いとも寒いとも分別する智慧

いまだ生じないので。知らず〳〵に暑かつたり寒かつたり腹が減たり渇いたりして居るので有る。第七に

受とは。生れて五六歳から十二三歳程の間の位で。六塵の諸法を受納れて。其好惡を了知する智慧が生ずるので。未だ婬欲は動かぬので有る。是を現在の前五支といふ。此次も亦現在の支で第八に

愛とは。十八九歳程の年齢の位で。淫欲の情を起し。見ては欲しい聞ては欲しいと。五欲を貪着する煩惱を起して來る。サレドモ未だ廣く普く及ぶといふ程には至らぬので。第九に

取とは。憎い可愛い惜い欲いの執着を生じ。意に適へば悅び。適はねば瞋り。貪欲の念盛んに騰起して八方へ走せまはる。二十歳以後の位である。第十に

有とは。前の第九支迄の所で。心と行ひとに造る所の業感に因て。未來の生緣を結ぶので。有とは其果を占有するの義。又有漏の因といふ解も有る。扨此有は過

去の行と一とつもので。過去に行といひ現在に有といひ名を互ひにしたまでの事。此愛取有の三つを現在の後三支といふ。前の五支は過去の業報に因て受る所の現在の果で有て。後の三支は現在の現業で有て未來の因となる所のもの。合せて現在八支で有る。是から次の二支が未來へ係るので第十一に生とは。現在の八支の業に因て。未來の生が決定して。正しく其生を受るので有る。第十二に

老死とは現在の業感に因て。未來の果を感じ。或は幻或は老。其報線の盡るとき終に死に至るので。所以に老死と號けたもの。扨此生老死の二支は現在の八支と一つもので一一其名目を言ふべきを前に在るが故にこゝは略して生老死の二支として。此中へ皆籠たもの

扨斯ういふたばかりでは判然と解りにくいかとも思はれるので。いま圖を出して御目に懸るから此圖に依て照應して見ると能くわかるのである

十二因緣

過去二支因 — 無明 / 行

現在五支果 — 識 / 名色 / 六入 / 觸 / 受

現在三支因 — 愛 / 取 / 有

未來二支果 — 生 / 老死

○無明ト愛ト取トハ煩惱ニテ即チ心ナリ

○行ト有トハ業道ニテ即チ色ナリ

○識ト名色ト六入ト觸ト受ト生ト老死トハ苦道ニテ即チ色ナリ

但シ識ハ五蘊ニ在テハ心ニ屬ス今色ノ中ヘ數ヘ入レルコトハ此ノ識形ヲ爲ス因ナルガ故ニ。又六塵ニ對シテ衆苦ヲ釀ス所以ノモノナルガ故ナリ

○支ト云フハ十二支ト云義ナリ

最初の無明の一支は十二共に凡て係るので。第二の行が因と成て。現在の果を

生じ。現在の八支が因と成て未來の二支の果を生じ。此生老死の二支が即過去の行支で有る故に。是が亦因と成て來生の果を生じ。互ひに因となり果となり。旋り〳〵回轉じて更に果しのないのか。此十二因緣といふもので有るのじや」

無明盡とは。緣覺の人は此十二因緣を觀じて修行して。終に最初の無明を盡すので。無明が盡る故に行が盡き。行が盡るから識が盡き。乃至老死を盡して眞空の理を獲得するのである。されば此本文の前の無明老死と云ふは。凡夫の輪轉に付て云ひ。無明盡と乃至老死盡とは。緣覺所得の勝境に付ていふので。まづ十二因緣といふことは大略斯ふいふわけのもの。扨又

無無明。無無明盡等とは。般若眞空の中にはもとよりして無明はない。無明が無れば餘の十一は有りやうは無い。然れば無明を盡すといふ事も無い。元來無いものを無くしやうは無いので。緣覺小乘門に在ては。斯樣な順序階級も立るので有るが。大乘門般若の中にはそんなものはまるで無いといふことじや

㊂紫羅帳裏撒眞珠　「十二因緣を無いと言れるが。予の眼で見ると立派に有るは。而かも其見ごとなことは。紫地に繡の有る羅の帳の裏へ。水晶の玉を撒ちらしたやうに見える。其美しい奇麗なことは。なんとも喩へやうはないわへ」

○破布囊裏眞珠　「迷ひの上から言て見ると。汚穢破布囊の中に明珠が這入て居るやうなものじや」とは破布囊を十二因緣に喩へ。眞珠を佛心に喩へたものじやが。是は十二緣起の中に佛心が包まれて居るの意ではない。十二緣が即佛心じやといふ意味なので有る。

○智者正知寶　智者とは活眼の人のこと。般若の眼から見る時は。其破布囊が其儘無上の眞寶じやといふこと知て居るから。無じやの空じやのと徒言は云はぬは」

○牛飲水成乳蛇飲水成毒　「此二句は佛經の中に出て居る語で十二緣起も迷はなければ其まゝ佛心の妙用じやが。自ら迷つて之に轉せられるから。生死

流轉の苦しみとなるので有る同じ水でも飲人によつて乳にもなれば毒にもなるのじや

○五雲常擁人不到肅索仙家十二樓　是は十二緣の眞相を仙家の形狀に擬へていふので五雲は五蘊の實相に喩へ人不到は思慮分別の及ばぬ所に喩へたもの肅索は鎖りかへつて寂然なことで法性常樂の娛みを仙人の境界に擬したもの十二樓は即十二緣起のこと寂寞たる山中の仙家には常に青黃赤白黑の五色の雲が棚引て四方を擁ひ得も云れぬ樂境で有が世間の人は一人も往人が無い只仙人のみ住で悦樂んで居る其又仙家の廣大なことは天然に造られた十二の樓閣が有て其美麗なことは言ふばかりもなく出入自在の遊戯三昧アラ面白の狀態かなといふ按排にやつたもの

㊀十二緣生十二滅生名凡夫滅聖人　緣生とは十二緣が生するの義で凡そ人と形を受る者此十二の旋轉はどうしても免れることは出來ないので始終此中に在て還流して居る是を凡夫と名け又此十二を滅盡して無生を悟るを聖人といふ聖人は緣覺の尊稱で同じ二乘の地位に在ても聲聞よりは一段立勝つて居るので尊んで聖人ともいひ又辟支佛とも稱するので有る

○此維獨覺所觀境　此維とは上の十二滅を指のので緣覺乘の人が觀得する所の勝境で有るといふこと獨覺とは是も緣覺の一名で此緣覺には部行と獨覺との二種の部類が有るので多勢連立て共に修行する是を部行緣覺といひ又獨覺とは無佛世界に只獨り世に出て飛花落葉の無常を觀じ十二滅を覺つて眞空を得るので此獨覺は稀に出る者で有故に又稱して麟喩といふ稀に出る所の麒麟に喩へたものサレドモ今こゝにいふ獨覺は部類の差別に拘はらず只緣覺といふことになるので有る

○空裏浮飛眼裏塵眼裏飛塵誰見得　「十二緣じやの緣覺じやのと清淨な空中へ空華を飛ばせるやうなもの邪魔物で有るわへしかし此塵の性體は容易

には見えぬが。誰が見て呉るで有うか」

○可貴圓頓大法輪　圓頓とは佛の五時の說法の敎義を。八趣に判釋したもので。即ち頓敎漸敎秘密敎不定敎藏敎通敎別敎圓敎と。是を八敎といふ。此内で一切階級に度らずして頓に悟るを頓敎といひ。即ち禪門の宗趣などが是で有る。又人々具足箇々圓成の實相。草木國土悉皆成佛の端的を示す是を圓敎といふ。法華經等の類が是で有る。大法輪とは佛の說法のことで。圓頓大法輪とは。佛の說かれる大乘法といふことになるのじや。二乘の地位で見ると。只自利のみを圖つて利他の慈心が缺て居るので。ソコデ卑しめて小乘といひ小果といふ。又佛法大乘の法門は。それとは違つて。飽まで四弘の誓願に策て二利の願行を推貫いてゆくので。今此心經に說かれる所などが即ち大乘純萃の法門で有のじや。ソコデ可貴圓頓大法輪と凡ては一般に大乘の法門を指ので有るが。分ては此般若心經へ重にかけて讃歎するので。此七字の中には。十二緣起の法門を稱讃する意を含ませたもので有るのじや

○法輪影裏親薦得　法輪影裏とは。今は觀音大士の說法にかけていふので。こゝでは十二緣生の法門を指たことになるので有る。親薦得とは上の無無明無無明盡等の實相を親薦證得したならばといふことで。即ち大乘法門の眞味を薦取するの義になるので有る

○超過狐癩野干身　狐癩はカッタイ病で野干は野狐のこと。佛曾て曰く緣ひ狐癩野干身となるとも二乘偏眞と爲ること勿れと。訶責されて有ので。今この狐癩野干は聲聞緣覺を指たもの。「小果の窠窟を超過て佛と親く手を取て共にゆくことが出來るで有う」とこゝに至つて無十二因緣無十二滅が親く我が物になるぞといふこと

無苦集滅道

夜明簾外珠。癡人按劍立。水中鹽味色裏膠青。白鷺下田千點雪。

黄檗上樹一枝花　夜半著鞋雲外奔
通紅四箇鐵崑崙　非終非始非圓頓
集諦苦諦道滅諦　不覺自燎卻面門
陳如跋提及拘利
莫謂鹿園摭蝦蟆　金仙密待大乘根

㊍無苦集滅道　苦集滅道是を四諦と云て。聲聞乘の修する所の觀法で。惣諦は四諦で有るけれども。此一諦毎に種々の修法が有るので。或は三賢五停心又は三十七道品じやの七聖十六心のと階段が有り。また種々の階級が有て。夫をいろ〳〵に修し上げて終に四諦を修了して。我空偏眞の理を得悟して。阿羅漢果を成ずるといふのが聲聞乘の極點で有る

提解云苦諦ハ一切有爲法ハ皆苦ナリト觀ス。集諦ハ煩惱惑業能ク生死之業ヲ集聚スト觀ス。滅諦ハ一切有爲法ヲ滅盡セント觀ス。道諦ハ道之涅槃ヲ悟ラント觀ス。今時ノ禪者。多ク此四諦ノ修行於墮ス。憐愍ス可キ哉。抑前ニ說クガ如ク。一一ニ能ク自知シテ根源ヲ盡セバ。固ヨリ不生不滅也。何ノ苦集滅道トコトカ之レ有ラン

と有て。大乘の實理の中には。迷悟の兩頭を萬里に離れ。生滅苦樂を萬々里に離れたもの。最も大乘の菩薩も此四諦を修さぬのではないが。聲聞の觀念とはソックリ觀じかたが違うので。細かに云へば四種の四諦が有るので。四種とは。生滅四諦。不生滅四諦。無量四諦。無作四諦。この四種で。此内後の三つが菩薩の修する所で。早く云へば名目を聲聞に假りて。菩薩行に爲るといふやうなわけで。最も大切な修行で有のじや。所を本文には般若眞空の中には無苦集滅道といふて有る。又師の提解にも。何ノ苦集滅道ト云コトカ之レ有ントいふて有るが。是も前の提解に言うて有る通り。無ノ苦集滅道と讀を改て見る時は。略其意が通じ

るので有る

㊗夜明簾外珠　「苦集滅道は確かに有るぞ。而かも玻璃の簾の中に夜光の明玉が輝いて居るやうなもの。此見ごとな美しいものが有では無いか」

○癡人按劍立　「暗夜の昏い簾の中に光りを放つて居る故に。馬鹿ものが見ると妖怪じやと思ふて。劍を拔て寄らば斬んと構へて居る。此美しい苦集滅道を。無いなぞといふは。儞も馬鹿者のお仲間じやナ」

○水中鹽味色裏膠青　海水の中に鹽は滿て居るけれども。眼には見えぬ。青黃赤白の彩色の中に膠は悉くゆきわたつて居るけれども。是も亦眼には見えぬ「苦集滅道の中に般若の智光はゆきわたつて居るのじやが。外からは見えぬ」といふて置て。是からその見えぬ樣子を形容していふのじや

○白鷺下田千點雪。黃鸎上樹一枝花　「雪降に田面一面白妙に成た所へ。鷺が幾羽も下りて遊んで居るが。只眞白で鷺の姿はサッパリ見えぬ。又梅の枝に一

面花が咲て居る中に。鷺が留つて居るが。咲亂れて居る花に紛れて。鷺の姿は一向わからぬ。有相に著て居るうちは無相は見えぬ。虛空を睹視て居るうちは。眞空の實相は到底見えぬ」

㊗通紅四箇鐵崑崙。夜半著鞋雲外走　「四諦の判然有事は鐵砲玉の眞紅に成たのを轉がし出したやうなもの誰にも見えるじやがその彈丸が夕夜半に鞋を著て。雲の外へ走つて仕舞た。ソコデ誰も知りてが無いのじや」

○集諦苦諦道滅諦。非終非始非圓頓　凡そ如來一代の說法を五時に判て。華嚴。阿含。方等。般若。法華涅槃の五時と立へるのじや。サレドモ華嚴はいかにも向上なお說で有るので。菩薩乘の人の外には誰も聞得なかつたので。更に思惟をなされて。阿含經をお說きなされた。是は方便敎と云て。聲聞以下の機に應じてお說なされたもので是を小乘敎といふ。今敎義の方から順序を立れば。華嚴は純大乘で有から。是は別に置て。阿含部を以て如來說法の初度と云へるので有

る。此順序に因て唐の賢首大師が。佛一代の教旨を五種に判して。小乘教。大乘始教。大乘終教。頓教。圓教。の五教と立られたので。初メの阿含部は方便教である故。是を小乘教とし。次の方等部で始めて大乘に說及ばされたのであるから。是を大乘始教とし。般若と法華涅槃とを大乘終教と立て。其終教の中から圓頓と二つを開いて華嚴を頓教とし。法華を圓教とするので。是に依て今此、非終非始は般若と方等を指すので。非圓頓は法華と華嚴にあたるのであるが。畢竟は此、配當に用は無いので。眞實無相の苦集滅道は。一切經の中凡て一字不說で有るといふことじや

○陳如跋提及拘利。不覺自燃郤面門　陳如と跋提と拘利とは人の名で。是は佛が鹿野苑で初めて苦集滅道の四諦の法をお說なされたとき。其會座に在て。眞の道諦を得度した人なので。まだ此外に頞鞞と十力迦葉との二人。りが有て是を初度の五人といふ。今三人の名を擧て跡の二人りは略したもの。佛が抑初て濟度せられたのが此五人で有るので。不覺自燃郤面門とは燃はヤクといふ字じやが。こゝでは火で燃た事ではないので。不覺不知、我身といふものがスッパリ無くなつて。眞の悟の開けたといふことじや

○莫謂鹿園撥蝦蜆　鹿園は鹿野園のこと。初メて阿含經をお說なされた所の地名である。夫故鹿園と云へば阿含經といふ事になるので。撥とは網で掬ひあげて水を漉ことで。こゝでは濟度といふことになるのじや。蝦はエビザッコ蜆はシヾミで。魚類の中でも最も小さな物で。小乘聲聞に喩へたもの。佛が阿含を說れた時は小乘の爲めに計り說れたやうに見えるけれども。決して然うで無い。小乘經を說れる中に密に大乘を說れて居るので。聽く人がきけば小乘即、大乘で有るので。されば。こそ陳如等の五人の如き。大悟の人が出たのである。然るを阿含の時と云へば。あれは小乘教じやイヤ方便教じやと。輕々に思ひなして居るのは。佛教の眞味を知らぬので有る。夫故に莫謂とは。阿含部に大乘はない

なぞとは。決していふなといふことじや

○金仙密待大乘根　金仙とは金色の仙人で即ち釋尊の事。表に小乘教を說れるうちに。隱然と大乘根の者を度せられてあるのである。此苦集滅道も。小乘根の者が聽ば小乘となり。大乘根の者が聽ば大乘となるので。天台大師が判教された八教の中に。秘密教不定教の名のあるのは。此等の事をいふのである

無智亦無得

又是鬼家活計。此語錯會底甚多。棺木裡瞠眼。分明紙上張公子。

盡力高聲喚不響

黑火洞然黑暗光　茫茫天地失玄黃

山河不在鏡中觀　百億須彌空斷腸

㊟無智亦無得　漸々に前を受て來て。何もかも無くなし切た所で。尙此方の腹の中に。智といふものも無い。亦得といふものも有はせぬといふのじや

提解云是ノ如ク見得分明ナレハ。元來之ヲ明智モ無キナリ。智モ無キガ故ニ得無キナリ得無キガ故ニ得無分別之念モ無キナリ。と有て。此に至つて眞般若の實相が現前するので有る。古人も此五字心經中の眼目なりと云はれて居て。智解情識の蔭覗も出來ぬ實に大事な一句であるのじや

㊟又是鬼家活計　鬼家とは死人を埋る穴のこと。無智亦無得などゝ途方も無いことを言ひ出したものじや。夫ではまるで空に成て仕舞は。死人穴へ落込で息ばかり通つて居るやうなもの。何の役にも立はせぬは」

○此語錯會底甚多。棺木裡瞠眼　「其樣ことを言ひ出すと。皆其言句に附てまはつて。片端から誤解して。空々寂々の自分免許で。棺桶の中へ屈み込で。目ばかりパチクリして居るやうな不覺悟が簇々出來ますぞ」

○分明紙上張公子。盡力高聲喚不響　張公子は人名を假りていふまで

のことで。此人と指人は無いので。只繪に描た人こいふこと。繪に描た人間は畫面には分明と見えて居るげれども。何程喚でも返辭はせぬので。是は眞實を得た人の腹あひを出して見せたもの。無智無得の眞相を自心は知て居るけれども。口へ出して体へる事は出來ぬ。グッともスッとも云事は出來ない。何程高聲に力を盡して尋乞ふとも。是ばかりは云て貰ひやうは無いのじやから。如何しても箇々冷暖自知するより外に仕樣は無いので有る

(朔)黑火洞然黑暗光　眞黑な火が熾んに燃て。眞黑な光が世界中へ放つて居るが。眞黑クロベスでサッパリ見えぬ

○茫々天地失玄黃　茫々とは只果もなく廣いこと。玄黃はクロイとキイロで天地の容色といふことになるのじや。黑火の黑暗光で照すときには。天地萬物何もかも其色相を失つて無くなつて仕舞といふこと。大小の天地も自體を失つて仕舞で有う」

○山河不在鏡中觀　此一句は碧嵒錄の雪竇の偈頌の中の一句じや。鏡は心に喩へたもの。「山も河も世界も萬物も。何もかも一心の中に藏れて仕舞て淸洒爽快眼にかゝらぬは」

○百億須彌空斷腸　百億須彌のことは前にいふた通りのもの。今こゝでは諸佛無相の眞體に擬して見るので有る。斷腸は腸を斷つ悲哀の情で。「佛も助ける衆生が無くなり。彌勒も建立する世界が無くなつて。ヤレ結らぬことに成たと定めし喞辭を言で有う」

以無所得故菩提薩埵

放下著。抱贓叫屈。隨緣赴感。靡不周。而常處此菩提座。不明三八九對境多所思。

菩提薩埵摩訶薩

唐飜道大心衆生

入三途代衆生苦
誓不取偏眞小果
虛空直饒消殞盡
遊戲十方不待請
上求菩提化有情
永鞭願輪利群氓

㊍以無所得故菩提薩埵　最初五蘊皆空からして。空中には六根六塵の十八界の諸法もなく。凡そ何もかも眼にかゝるもの一物も無くなつて。無智無得と眞正に心に得る所もなくなつて。全く眞の大菩薩で有るのじや

提解曰無所得處即大道大心之端的也と有る。所へ著語に

㊍放下着　とやつた。放下着は抛り出せといふこと「ナンジャ所得ガ無いから菩薩じやといふか。其樣なことは言ふものでは無い。夫では素寵棒に成て仕舞ハ。其樣な物は放下着して仕まへ」

○抱贓叫屈　贓は贓物で盜物といふこと。屈は强て無實の罪に落すといふ意味で「無所得なぞといふことは盜み物で有う。盜み物を抱へて居ながら知らないといふやうなものじや。人を欺す盜人根生。見え透て居るぞ」とまづ斯ふ毒語を吐て置て是から菩薩の眞德を擧るのじや

○隨緣赴感靡不周。而常處菩提座　こゝは菩薩の神通妙用を明すので。衆生の緣に隨て其身を百千無量に變じ。十方の衆生の前に現じて。一一に濟度し。又衆生の心に仰慕感念する所が有れば。數千里の間も忽ち其前に身を現じて是を救濟し如此周く十方に身を現ずるけれども。而かも常に菩提の座處て。其本座を離れるといふ事が無いといふ。是が菩薩の神通妙用じや。維摩經に不起滅場而現諸威儀と有る此事じや。扨此れに就ては定めし疑ひを抱く人が隨分有るで有うが。一口に魔法遣といふまいぞ。こゝに一とつの密旨が有る。それは如何なことじやといふと

○不明三八九對境多所思　此三八九を明めぬうちは。一切の境に對して思想分別を擬つて。自己の定木に適へば悅び適はぬければ棄るといふのが通

常人間の質で有て。其うちは到底菩薩の境界は見えぬので。然れども此三八九は心事上に在て理體に關したことで有れば口釋の仕樣は無い。所謂教外別傳じや

㊀菩提薩埵摩訶薩。唐飜道大心衆生　薩埵の事は前の本文菩薩の所でいふて有る通りのこと。今こゝへ其名稱を擧たのは。只名を唱へるばかりでは無い。其眞德の廣く大に美しいこと。只々「菩薩なるか那〳〵」といふこゝろで只管歎美するので有る

○入三途代衆生遊戲十方不待請　八地以上の菩薩に在ては。もはや佛に隣るので。儒道で云へば亞聖の位地で。自ら佛に成らうと思へば直になれるので有るが。大悲の爲に佛にならず。煩惱を餘して生死に與り。凡夫と事を同ふして。三惡道にも生を受け。衆生に代つて其苦を受て。普く遊戲十方不待請と。衆生の方から請求るに非るをも。菩薩自ら手を伸して。其苦を救ひ導くので。是を不請友といふ

○誓不取偏眞小果　偏眞とは偏へに空理に耽著して差別の妙理を厭ひ棄る是を偏眞の少果といふ。而かも自利のみに汲々として利他の悲心が缺て居るので。眞の佛法とすべきものでは無いので有る。大乘の菩薩は。誓てそんな卑劣な小果は取らぬといふこと

○上求菩提化有情　上求菩提は自利の修行で。化有情といふのが利他行で。どつちが缺ても佛法が片輪になる。ソコデ菩薩は此二利の願行に棄じて。衆生界あらん限り。其力を盡されるので有る

○虛空直饒消殞盡。永鞭願輪利群氓　虛空が消殞てなくなつて仕舞といふことは無いことじやが。それは有ると許すともといふ枕詞で。下の句を喚興すのである。群氓は群はムラガル氓はオロカナタミといふこと。永鞭願輪と願輪は四弘の誓願で。鞭とは自ら精進にして永劫撓ます。一切衆生を利益す

るといふこと。扨此大慈大悲が。何方から出るといふと。前の本文の無智無得の眞體に具する眞理で有て。此根本から運び出す妙用であるのじや。依て此無所得の三字の體には。甚深不可思議の妙理を含有して居る緊要の一句で有るので。容易の看をしてはならぬのじや

依般若波羅蜜多故

苦屈苦屈。若見一法可依怙。驀地須吐卻。幽州猶自可。最苦是江南

可談羅漢有貪嗔　莫說菩薩依般若
若見一法有所依　非無罣礙即繫縛
菩薩般若體無殊　如珠走盤瀟洒落
非愚非智非聖凡　只恨畫蛇添雙脚

㊟依般若波羅蜜多故　依般若とは自己の佛性に職として之由るの義で。彼の孟子が由仁義行非行仁義といはれたやうな意味なのじや

提解云般若波羅蜜多。皆大道心ヲ稱讃スル之語也。無所得之處。直ニ大智慧大涅槃之端的也とある。此の本文の下の故字は次の句へかゝるので有る

㊟苦屈苦屈　是は般若の外に我なく。我の外に般若の無いことを明すので「元來有もせぬ物を擔ぎ出してわざ〳〵寄懸り物を拵へたヤレ苦屈苦しや」

○若見一法可依怙驀地須吐卻　「若空とか般若とかいふやうな一とつの法の依怙むべき物が有ると見たら。大きな邪魔物じや。そんな物が腹の中へチヨイドでも出來たら。驀地に吐き出してしまへ」

○幽州猶自可。最苦是江南　此二句は古語に有るので幽州は北國の極寒の地で凌がたく住居かたい所。江南は至つて風景のよい繁花な土地で。誰も彼も慕ひ欣ぶ所。サレドモ今江南は戰爭が起つて。軍や最中。商人や農人は事業

を失ひ。女兒等は兵卒の爲めに殘酷な目に逢ふ其苦しい事難義なこと。幽州の方がまだ〳〵增で有るといふ事。眞如法性の土は。安心快樂の淨土で有るけれども。空だの無だの般若だのといふ。我見の擔ぎものが有ては。イヤ苦しい〳〵。もとの凡夫がましで有るはへ」

㊀可談羅漢有貪嗔莫說菩薩依般若

羅漢は一切の煩惱を斷じ盡して阿羅漢果を得るので有から。阿羅漢に煩惱の有う筈はないので有るが。志かし夫は有ると談ずることを許すとも。下の句にかゝる枕詞じゃ。莫說云〻と。菩薩が般若で般若が菩薩じゃから。般若が般若に歸ることは出來ぬ。自身で自身の身軀へ寄係るといふ道理はない。菩薩が般若に依などゝは。忘れても言て貰うまい」

○若見一法有所依。非無罣礙即繫縛

「若し空とか般若とかいふやうなものが一とつでも依羅物の有うちは。必ず腹の中に罣礙が有のである。自心で自身を繫ぎ縛つて居る。不自在底の凡夫といふものじゃ

○菩薩般若體無殊。如珠走盤瀟洒落　「菩薩と般若は一體じゃ。依るも依らぬも有はせぬ。物の爲めに礙られるやうな不自由なものでは無い。瀟は水名で又アメカゼハゲシと訓ずる字じやが。こゝでは只淸洒としたこと。洒はアラヒス、グと訓じて洗ひあげて爽快した事。落は落々で自由の貌。水晶の珠が盤の上を轉々走つて居るやうなもの。思案分別を離れきつた美しい境界。洒々落〻じゃ」

○非愚非智非聖凡。只恨畫蛇添雙脚　「扨其脫洒自在な菩薩といふものはどんなものかと推て見ると。呆でも無い利口でも無い。佛でも無い凡夫でも無い般若でも無い菩薩でも無い。是と措て名の付やうは無い。只其まゝで少しも事は缺ぬのじゃ」然るを只恨なことには。依般若などゝいふから。菩薩と般若が二つに成るは。恰ど蛇の畫を描て雙脚を添たやうなもの。切角の畫を無第に

して仕舞た」

心無罣礙。無罣礙故。無有恐怖。遠離一切顛倒夢想。

不是分外事。神通竝妙用。荷水也搬柴。擧頭殘照在。元是住居西

非心非性非涅槃　非佛非祖非般若

十界無孔熱鐵鎚　虛空擊碎常寥廓

纔開口獅子嚬呻　狐兎狸貉盡驚懼

應物現身如幻師　隨機轉變無造作

見他李母患左肩　敷壯灸張婆右脚

顛倒夢想恐懼憂　宛如一滴投巨壑

赤使齊時被輕裘　鯉逝時有棺無椁

喚起庵中午眠僧　告山童折離偸籌

㊟心無罣礙。無罣礙故。無有恐怖。遠離一切顛倒夢想。　罣礙はサハリサハルと訓じて。少しでも心に罣礙物があれば不自在で有るのじゃが。今依般若波羅蜜多故。心といふものも無く。本來無一物で。何にもさはる物が無い。蓋天蓋地眼にかゝるものが無いから恐怖るといふことが無い。遠離一切顛倒夢想と遠離は遠く離れるといふ字じやが。遠く離れた所にまだその物が有といふ譯では無い。顛倒夢想がまるで無いといふことじや。顛倒とはサカサマニタホレルといふことで。頭を地にして足を天にして居るやうな貌じや。まづ第一に我身の法身なることを知らずに。有相に執着して已の身軀じやと思ふて居る是顛倒じや。虛妄無體の妄想分別を認て己が心として却て本有の眞心を空なものじやと思つて居る是顛倒じや。又有相に執着して苦を厭つて樂を願ひ煩惱を離れて菩提を求め。或は空理に耽着して因果を撥無し我見を增長する。又は常樂我淨

の四顛倒となど〻言て。何もかも逆さに見る。是を顛倒といふ。夢想とは前にも言ふた通り一切の妄想の事。扨又遠離といふても修行して里礙を無くすの顛倒を遠離するのといふ。煩擾仕事が有のでは無い。今此一段は只依般若波羅蜜多故自ら如此で有といふことで。眞心無所得の其まゝの妙境を掲げ擧たもの

㊀不是分外事　「大士は大さうな事のやうに言れるが。ナンノ珍らしい事が有ものか。祖師門下の眼から見れば。朝飯後の茶粉といふもの。衲僧家の常の事じや」

○神通並妙用荷水也搬柴　「神道妙用誰も彼も皆行て居るでは無いか」といふて置てこゝに大に子細が有るのじや

○擧頭殘照在。元是住居西　是は唐詩選に出て居る二句じや「日が西の方へ傾いて夕日が斜にさして居るが。元己れが住つて居た所の西の方じや」是は白隱師の末後句といふもので。此一段の著語の意を。此二句で結んだもの。是は口釋の仕樣はないのじや

㊀非心非性非涅槃非佛非祖非般若　其里礙も無く恐怖もなく。顛倒夢想を遠離した心體は。如何なものじやといふと心でも無い佛性でもない。佛でもない。祖でも無い。涅槃でも般若でもなんでもない。更にヘンテツもないものじや」と是が般若波羅蜜多かなんだか受取にくい。ソコデ「今白隱が其妙用の有所を出して見せやう」といふ按排に。次の句を唱へ出されるのじや

○十界無孔熱鐵鎚。虛空擊碎常寥廓　十界とは六道四聖のことで有るが。まつは天地世界中といふやうなもの「世界一ぱいの孔無の鐵の搔鎚而かも眞紅に燒た極熱の鎚で。天地虛空を粉微塵に擊碎て仕舞た所で。一向なんとも無い。常に寥かに廓として居るは」

○纔開口獅子嚬呻。狐兎狸貉盡慄慴　嚬呻とは獅子が身を振はせて叫こと。獅子嚬呻スレバ「百獸腦裂と言て。獅子が一ト聲叫ぶと群獸が皆頭腦が裂る

といふ。ソコデ狐兎や狸貉等が盡く驚き懼れるので。此般若の眞體から州云無と唱へ出すと。世界中の者が喪身失命じや。此無字で照らす時には。外道の斷見常見や聲聞の空理悟は忽ち僞物の化が顯はれるから驚き懼れて逃出して仕舞のじや

○應物現身如幻師　幻師は幻術者の事で。木のきれ端などが一とつ有れば。夫を女にしたり男にしたり。鳥にも獸にもして見せるので。全く男にも女にも見えるので有て。術を解けばもと木切で有るので。此部類が印度には多く有るので。夫故經文の中には屢々喩に擧て有る。夫に倣て今こゝへも喩に引かれたので有るが。そはたゞ眼に見えた所が似て居るといふだけのこと。幻術者のする所は方術に依て行ふので。菩薩の神通は心德の妙用であれば。其元はまるで違つて居るのじや。昔し觀音大士が好色な男を濟度せられるのに。美女に現じて見せられた。此男大に戀慕して。妻に成て呉よといふ。夫から約束して嫁に往た。婚禮の盃の濟だ所で。其美人が少し氣合が惡いからさきへ寢るといふて臥處へ這入た暫くして往て見るといつか其美人が死で居たので。此男大に悟る所が有て。佛門に入たといふ話がある。應物現身とは是等の類をいふので有る

○隨機轉變無造作　昔し或る婦人が二歳になる愛子を亡くして悲しみに堪えず。何ごとも手につかず。只其子の事のみ思ひつゞけて。憂に沈み。毎日毎日泣て計り居た。親類緣者も。あれでは命もつゞくまいと。種々に曉して見るが。どうしても忘れられないで只管悲みに沈んで居た。或知識が其話を聞かれて氣の毒に思つて。其婦人を連れて來なされといふことで。夫から緣者の人が勸めて此婦人を知識の所へつれて往た。知識が偈は愛子を亡くされて嘸愁傷で有うといふと。夫から其婦人が其子の存生の時の事をならべ擧て。オイ〳〵泣て居る。ソコデ知識が偈は其子に逢たいかと尋る。逢たうございますといふ。夫なら予のいふ通りにすれば。屹度其子に逢はれるが予のいふ事を聞なさるか

といふ。モウあれに逢へる事ならば。どんな事でも致升といふ。ソコデ知識が夫なら是からアノ子は何方に居るで有う〳〵と。毎日〳〵朝から晩まで。寢る時も喰る時も。夫のみいひつゞけて居れば必らず逢れると言ひ諭した。ソコデ此婦人は其教の如く。毎日〳〵夫のみに成切て居た或時因緣成熟して。ソット氣が付て。一心の本源に透徹して眞實の悟が開けた。イヤア逢た〳〵と言て踊り上つて悅んで。知識の所へ禮に往て。其樣子をのべたので。知識も悅んで證明されたといふ。又昔し或武士が一休禪師の所へ往て。地獄なぞといふものが有物でござるかと尋た。スルト一休禪師は。ナンノ儞等にわかるものかとさん〴〵に嘲弄された。此武士大ィに怒て大刀を手に取て憤悱と成て挑つて來た。一休。それ〳〵夫が地獄じやと言れて。此武士ハット氣が付てイヤ是は恐入ましたと刀を捨て敬禮した。一休。ソレ夫が極樂じやと示されたといふ。隨機轉變無造作。まづ是等がその一例といふものじや。サレドモ此轉變は種々無量で。般若眞心の妙境で有るからして。其由て起る本源は。情識分別の模索主義では追付ぬ。ソコデ次の二句が出て來るのじや

○見他李母患左肩數壯灸張婆右脚　李母と張婆とは。李氏張氏は支那に多く有る氏じやからそれを假りていふまでのこと。日本の伊勢屋大阪屋といふやうなもの。利兵衛の母親の左の肩へ癰物が出來たのを。張助の老婆の右の脚へ灸を据て直してやつた是が解らぬうちは。菩薩の肚裏は見えぬぞといふ意味合じや。數壯は數七ツのことじやといふこと

○顚倒夢想恐懼憂。宛如一滴投巨叡　此憂字は本文には無いけれども意はもとより有ることで。七言句に置れたもの。巨叡は大きな壑といふこと眞の般若が我が物になつて。前の李母張婆の二句が眞正に手に入れば。顚倒や夢想や恐懼や憂苦の一切の迷ひは清洒爽快消失て仕舞ことは。恰ど一滴の水を那智の瀧壺へ投込だやうなもので。あとかたも無くなつて仕舞は」とまづ此二句で

是迄の意を一ト度結んだもの。是から端を改めて次の四句を唱へ出すので有るが。又決して前の意を離れたものでは無い。此次の四句は前の著語の擧頭殘照在の二句へ照應させたもので。此凡ての頌の惣體へ係るものである

○赤使齊時被輕裘　是は論語雍也篇に出て在る事で。赤とは孔子の弟子で。姓は公西。名は赤。字は子華と云ふ人で。孔子の爲に齊の國へ使者に往た。其時同じ孔子の弟子の再求が子華の留主中の母親の手當を何程遣はせましやうかと請問した。此時孔子が與之釜といふた。釜は米の升數で六斗四升の事じやが日本の八升に中るといふと。餘り少いから冉求が今少し增て遣て下されといふたので。孔子が夫なら庾を與よといはれた。庾は日本の一斗に少し餘るので。如何も少いと思ふたから。冉求が計らつて與五乘た。五乘は八十斛で日本の十斛足らずに中るといふこと。此時孔子がそれを聞て。赤之適齊也乘肥馬衣輕裘吾聞之也君子周急不繼富といはれた赤は肥た善馬に乘て輕く貴い衣裘を飾て往たのは。富で居るからである。貧に急迫して居るものには周く足して遣すが道。又富で不足の無い者に財を繼で遣すは道理で無いと訶せられたので。是れを聞て張子が可見聖人之用財と稱讃したのである。是は今日いふ濟經上の道理といふもので。財を用るにも自ら天然定則の有る事を示されたもので。白隱師のこゝへ擧られた意も亦こゝに有るのじや

○鯉逝時有棺無椁　鯉は孔子の子の伯魚の事孔子より早く夭されたので。椁とは棺の外へ又覆ひ飾る所のもの。孔子が其子の伯魚の逝れた時に椁を添る資格で無いといふて。椁無くして棺ばかりで葬られたといふ事。是には後世種々議論の有る事じやが。右に左定理の有所に從つて事を行はれたので有る。扨又白隱禪師が此二つの事柄を擧られたといふものは。天地には天地の常則あり。人には人の常則が有て。理は貫いて一理で有る。こゝを押へて出されたもの。眞空無相の般若の中に。甚深不可思議の活理が有て。流行して極りない。是が

白隱師の般若波羅蜜多じや。夫から今ひとつ

○喚起庵中午眠僧告山童折籬偷籜　庵中に坊さまが昼寝をして居ると。子僧が垣根を破つて竹の子を盗んでゆくから其庵主を喚起して「ヲイヲイ子僧が竹の子を偷んでゆくよ。起なさい〳〵」と是はなんのことじや。前の二句とは一とつか別か。是はチョイト六かしい。師の說に曰く此四句は白隱和尙の一本鎗じや摺上た眼で無れば容易には見えぬぞと言れた

究竟涅槃

陷人坑子年年滿。又是鬼家活計。充什麼臭皮韈。吾黨之直者異。於是父爲子隱子爲父隱

一切衆生生滅心　直維諸佛大涅槃

木雞含卵立棺木　瓦馬逐風歸本貫

(本)究竟涅槃　究竟とはギリ〳〵極點といふこと。涅槃は梵語で礵譯して滅度といひ。又義譯して不生不滅といふ。究竟涅槃とはいよ〳〵何もかも無くなりきつて仕舞た所

(義)陷人坑子年々滿　「那も無い是も無いと。何も乎も無にして仕舞のは。人を陷る落穴といふものじや。其樣な陷坑を堀て置くから。我も〳〵と轉り込で年々一ぱいに成て居るは。そんなことは言ふて貰うまい」

○又是鬼家活計。充什麼臭皮韈　「究竟涅槃などゝいふのは。死人穴へ屈み込で眼ばかりパチクリして居るので。臭つた破れ韈がものも無いはへ」

○吾黨之直者異。於是父爲子隱子爲父隱　是も論語に出て居る語で有るが。論語の意とはまるで別じや。白隱和尙の腕力で奪體換骨して出されたもの予が方の佛法はそんなものでは無いは。親子の中でも言ふまじきことは言ひはせぬ。空々寂々の死人佛法なんの役に立ものか」

○一切衆主生滅心。直維諸佛、大涅槃　「一切衆生が生れたり死だり。出來たり無くなつたりする。夫が即く諸佛如來の大涅槃といふものじや」前念滅して後念生じ。前滅後生〻〻〻〻と朝から晩迄念々生滅して居る。是が直に不生滅の當體で。生滅の心を離れて別に不生滅の心が有はせぬは」といふて置て是から次へ活佛法の標準を掲げるのじや

○木雞含卵立棺木。瓦馬逐風歸本貫　「木で彫た鷄が卵を抱て棺桶の前に立て居ると。陶器の素燒の馬が風に順つて馬部屋へ歸つてゆくは」是はなんの事じや。活佛法を脱出したのじや。本貫は本來の住家といふこと

三世諸佛依般若波羅蜜多故

壓良爲賤。大抵還他肌骨好。不塗紅粉自風流。鑊湯無冷處

般若生三世諸佛　三世諸佛演般若

主伴無盡唵蘇魯　舊巢受風鳴宿鶴

㊟三世諸佛依般若波羅蜜多故　此般若波羅蜜多は前の菩提薩埵許りではない。三世一切の諸佛も。皆是に依て佛になられたので有て。此依といふ字は三世諸佛は皆此般若波羅蜜多の大眼を開て佛となられたといふ意じやが。實は三世諸佛が即其まゝの般若で有るといふことじや。古語に青々翠竹は道人之心。鬱々黃花無非般若と有て。天地世界山川草木。悉皆般若波羅蜜多の顯れて有るのじや

㊟壓良爲賤　「佛は元來佛で有る。決して般若などに依りはせぬ。佛が般若に依などゝは本來善良な貴い佛を强て壓へて賤しめるといふもの。失禮なことをいふまいぞ」

○大抵還他肌骨好。不塗紅粉自風流　大抵はこゝでは佛の眞相を指ので。還は其まゝで善といふ義。肌骨好とはもとより奇麗な姿じやといふこと。紅粉

を般若の二字に喩へたもの「佛は素より美しい容貌好じや。別に般若などゝいふ粧飾は入りはせぬは」

○鍋湯無冷處　「鍋の中の沸騰た湯の中には冷たい所は有はせぬ。無のが當然。其まゝでよいのじや」

三世諸佛は此般若から出現まし〳〵

㊀般若生三世諸佛。三世諸佛演般若。

たので。般若は諸佛の母で有る。而して諸佛は此般若の妙理を說て一切衆生を度せられるので有る。而かも諸佛は般若の說不休で水に住蛙花に啼鶯吹風波の音迄も。いづれか般若に非るはなく。年中般若の說通じや

○主伴無盡唵蘇魯　主伴は主賓といふも同じとで。男に女。年齡に幼童。山に川。月に群雲。花に風。六根に六塵。佛に凡夫。米子も杓子も。互ひに賓となり。主となり。皆悉く無盡に般若を說て居る。唵蘇魯は陀羅尼で有るから口釋は出來ぬので。只こゝでは般若を說て居る聲を形容していふたもの。其聲は如何な聲じや

○舊巢受風鳴宿鶴　「舊巢が風で動くに付て。中に住で居る鶴がもし此巢が壞れはせぬかと。危ぶんで啼て居るは」

得阿耨多羅三藐三菩提

不可向虛空裏釘橛去。犢牛縱可生兒。諸佛終不依般若得菩提。

何故。般若菩提體無二故。若又更有一法可得即非如來。譬如大火聚近傍則佛祖亦喪身失命

白獺可緣木得魚　佛不依法得菩提

道如來有一法得　如道應眞各有妻

㊀得阿耨多羅三藐三菩提　得の下の八字は梵語で。阿耨を醍して無と言ひ。多羅を醍して上といひ。三を正といひ藐を等といひ菩提を正覺と曰ふ。無上正等正覺といふことじや。蓋天蓋地盡十方に充滿して萬物の本源。宇宙の主宰で。

最大最勝比ぶ物が無い故に無上といふ。實體有て安ならざるが故に正といふ。天地十方平等一枚の故に等といふ。眞實無妄の眞體を圓滿し賜ふが故に正覺といふ。其本般若波羅蜜多に依て。無上正等正覺を成就し賜ひしもので有ので。是を妙覺果滿の佛とは尊稱するので有る

提解云無上者。自性本來是ノ如ク不可得ナリト大觀スル。是最上上ノ達觀ナルガ故ニ無上ト言フ。正等者。山ヲ見レバ山ト等シク河ヲ見レバ河ト等シク萬境皆等シ。之ヲ正等覺ト謂フ。と有る。此等字の解は容易には手に入らぬ。坐禪工夫の上で初めて我物になるので有る。

(巻)不可向虛空裏釘橛去　「阿耨多羅三藐三菩提なぞといふものが何處に有るぞ。わざ〳〵其樣な名目を擔ぎ出して佛の眞體へ塗附るつもりか。なんのことはない虛空へ向つて針を打たり橛を打たりするやうなものじや。徒な事じや止がよいは」

○犢牛縱可生兒諸佛終不依般若得菩提　犢牛の六字は例の枕詞じや「男牛が子を生ことは有といふとも。佛が般若に依といふことは。決して無いことじや」

○何故般若菩提體無二故　「なぜといふに般若と菩提と二つはないは」といふた所で。實は般若の菩提のといふ名も無い。佛といふ名も有りはせぬのじや

○若又更有一法可得。即非如來　「若し又佛が予は斯ういふ法を得て居るといふ物が何か一とつ有たなら。夫は如來の僞物じや」

○譬如大火聚近傍則佛祖亦喪身失命　聚はアツマルと訓じて「譬へ十里四方も燃て居る大火事のやうなもの。チヨイとでも傍へ近付たら忽ち燒死で仕舞。佛でも祖師でも面出しは出來ぬ。況んや般若だの無上正覺だのといふ名目は。忽ち灰に成て吹飛で仕舞は」

(別)白獅可繰木得魚佛不依法得菩提　白獅は水に往で居るもの故猿のやう

に木登は出來ぬ。又魚も水に居るもので木の上に居らう筈はない是も亦無い筈の事をいふので。例の枕詞じや「鄰が木登をして魚を得ることは。夫は有と許すとも。佛が法に依て菩提を得といふことは斷じて無いぞ」といふ事じや

○道如來有一法得如道應眞各有妻　應眞は羅漢の別名で羅漢は偏眞の一方を得て居るのじやから。是を應眞といひ。又眞人とも云ので。而かも持戒堅固で有から決して妻を持ぬので。もし妻が有れば羅漢では無いので有る。如來の眞體に一法でも得るものが有といふのは。應眞等に女房が有るといふやうなもの。決して無い事じや」といふ事。しかし此佛が法に依て菩提を得ぬといふことは大に仔細の有る事じや。文に依て義を解したら大差誤になる。早呑込をしてはならぬぞ

故知般若波羅蜜多是大神呪

擔水河頭賣。何樓漆器莫拈出。字經三寫烏焉成馬。又是小賣弄。

夜行莫踏白非水多是石

可貴自性大神呪　轉熱鐵丸作醍醐

地獄闇浮天上界　雪花一片落紅爐

(本)故知般若波羅蜜多是大神呪　故知とは前を受て此理で有から判然知られるといふことで。故字は上へかゝり知字は下へ係るのじや。呪とは陀羅尼の事で陀羅尼といふものは。凡て梵語のまゝで譯語が無いから理は解らぬので。口釋も出來ず。只解らぬことを棒讀に讀で居計りの物で有るが。是がまた神變不思議な功德が有るので。楞嚴會上に阿難尊者が摩登伽の難を免れたのも此呪文の德で。又鈍根の者が陀羅尼の功力で悟が開けたり。或は日用の上の災厄を免れたり此外種々な利益の有ものでも。別に道理も義理も何にも無い只唱へものでも有て。而かも廣大な有難いもので有のじや。此呪字ハマジナヒと訓じて。大神呪は廣大な神變不思議な呪といふことで最も此の心經は大神呪で有と

讃歎したのでどんな呪が有ぞと云へば。第一に凡夫を佛にするといふ大きな呪じや。今此般若波羅蜜多陀羅尼では無いけれども。其功德の廣大なことを讃歎していふので有る

提解云。呪ハ陀羅尼ナリ。華ニ畢竟總持ト言フ。心之名也。言ハ自心之般若波羅蜜多ハ大神通ノ呪ナリ。不思議之呪也。大。且明ニシテ。實ニ光明遍照十方世界ノ呪也。是卽上上ニシテ無上之呪也。其神靈妙用比倫ス可キ物無シ。故ニ無等等呪ト言フ。是皆讃歎ノ辭ナリと有て。是より下の四段は。皆般若波羅蜜多の功德を讃歎するので有る

㊂擔水河頭賣　「大神呪など〻大さうに功能を擧立るが畢竟般若は人々箇々圓成して有餘つて居るは。それを外から賣に來たとて買人は無いぞ。近江の湖水の頭へ往て水を賣歩行やうなもの。誰も買人は有はせぬは」

○何樓漆器莫拈出　何樓とは何某樓といふことで。京橋の松田とか上野の揚出しとかいふやうな。割烹店の類をいふので。漆器とは漆塗の器といふことじやが。こゝでは缺たり几たりして遣ひ古しの膳椀といふことになるのじや。「般若じやの大神呪じやのと割烹店で遣ひふるした毀れ道具などは出して貰うまい。見たくでも無いわへ」

○字經三寫烏焉成馬　一とつの烏字も又寫し又寫しと寫して來ると終には焉となり馬となるので「大士よそんなに矢鱈に言立をしなさると。仕舞には大差悞が出來ますぞ」

○又是小賣弄　小賣弄とは自分の價物ばかり擧立て安賣をして賣つけたがる商人のこと。「壓賣は止にして貰はう」

○夜行莫踏白非水多是石　「夜路を歩行とき白いものが見えたら水溜りか石が有のじや。般若の事を輕忽思つて踏そこないをせまいぞ」

㊂可貴自性大神呪　是から本文の意を讃歎するのじや。自性は卽般若のこ

と。自己本性の妙用。實に貴ぶ可きの大神咒で。是を以て咒ふときは

○轉熱鐵丸作醍醐　醍醐とは此上なしの甘ひ味ひの極點の名稱じや。眞紅に燒た鐵炮丸が忽ち醍醐好美と成て。自由に口に喰はれるやうに成る。不思議なまじなひ。煩惱即菩提。凡夫即佛の早替り。生死即涅槃。娑婆即寂光淨土と變る。併し此咒ひをせぬうちは然うはゆかぬ。文字の上の分別悟では。眞個の安心は出來ぬので有る

○地獄閻浮天上界。雪花一片落紅爐　閻浮は即娑婆世界で。地獄閻浮天上界の三つを擧て。三界六道をこめたもの。自己般若の本性が一とたび光りを放つときには。今迄夢中に流轉て居た三界六道は。其まゝ寂光淨土と成て。佛と佛のお交際。迷ふが故に三界城。悟るが故に十法空。恰ど一片の雪の粒が爐の火の中へ落たやうなもので三界六道跡形も無く成て仕舞のじや

是大明咒

莫謂大明咒。拗折山形柱杖子。從來大地黑漫漫。乾坤失色日月呑輝。黑漆桶裏盛黑汁

本有圓成大明咒　光明寂照盡山河

無量曠劫罪障海　水上浮漚眼裏花

㊀是大明咒　明は闇を照すの義。無明煩惱の闇を照して。明々たる本心を獲得する咒ひといふこと。是が第二の讃歎じや

㊁莫謂大明咒　「人々箇々圓成の般若じや。大小明暗がどこにあるぞ。其樣な事は言ふまいぞ」

○拗折山形柱杖子從來大地黑漫漫　拗折はヘシヲルといふこと山形柱杖子とは。山から切出したまゝでまだ削も殺もせぬ柱杖といふことで。人の身軀に喩へたもの。黑漫々は眞黑クロベスあやめもわかぬといふこと。「大の明のと

名を付ずと。親から產出された此身軀を一とつ打殺して見るがよい。從來天地も世界も眞黑で何にも眼にかゝる物は有りはせぬは」

○乾坤失色日月呑輝　「天地も其色相を失つて。日月も光りを放つ地が無い

○黑漆桶裏盛黑汁　「恰ど黑い漆桶の中へ。眞黑な汁を盛たやうなもの。何處へ分別の施處は無いはへ」サアこゝからして不思議な活動が顯はれて來るので有る。

㊀本有圓成大明咒。光明寂照盡山河　「一とたび八識田へ一刀を下すときは。八々固有の般若の眞心。天地世界へ光明を放つて寂にして能く一切萬法を照して居る。常住不退の本佛光じや」盡山河は世界中といふこと

○無量曠劫罪障海。水上浮漚眼裏花　過去無量劫の曠遠の昔しから積積で來た罪障は。數へ盡せぬ多大なもの故に罪障海と海に喩へたもの。此大明咒の功德に依て。本源自性に透徹するときは大小多大の罪障も。一時に消滅して仕舞ので。譬ば「水の上の一粒の浮漚がプツリ消て仕舞が如く。又有やうに見えて居た眼中の空花が。ブイト空中へ消て仕舞やうなもの。山の如き罪障も跡形もなく消て仕舞は」此無始以來の罪障一時に消滅するの理に就ては。維摩經に維摩大士が二比丘の爲に說喩された明言が有が。夫をこゝで話して居ると。更に維摩經の講釋をするわけに成て。長くなるからこゝでは措ので有るが。誰方でも維摩經に就て見れば解る事ゆゑ一應申て置くので有る

是無上咒

脚跟下又作麽生。爲我拈將最下底來。墜葉雖憐跡雨感黃粱爭似暮雲親

最上最尊最第一　釋迦彌勒猶伊奴

此是人人本具物　唯要當人絕後蘇

㊥是無上呪　第三番目の讃歎じや。凡そ一切の敎中に。此般若波羅蜜多に超越した物は無いといふことを。無上呪と歎美したので。所へ白隱和尙が

㊥脚跟下又什麼生　「大士は上へばかり眼をつけて。無上など〻言ひなさるが。脚跟下はどうじや。足下がふらついて居ては役に立ぬぞ」

○爲我拈將最下底來　「高い所へばかり眼をつけずに。足もとの般若を出して貰はう。予は高い話しは聞たくはない。最も下底が懸望じや」と此二句で無上呪へ對する著語は濟むのである。是から次の二句は。所謂末後句といふもの。最も力をこめられたもので。口釋のしやうはない。只文義の上に付て言ふまでの事じや

○墜葉雖憐疎雨或黃梁爭似暮雲親　墜葉は木の葉のバラ〳〵墜る貌。疎雨はマバラに降る雨のこと。或はそれを見て面白く心に感ずること。黃梁は稻が實て下向に垂れて田面が一面黃色に見える樣子。暮雲親とは暮方の雲の景色。秋に成て木の葉のバラ〳〵落る音が雨かと疑はれ閑靜な面白い景色は。何共云へぬ味ひがあるが。まだ〳〵それより興味の有るのは。稻が實つて田面が一面眞黃色に見えて居る所へ。斜にさして居る夕日に添て。暮方の雲がそれ〳〵形造つて居る按排は。如何も云へぬ絕景じや」

㊥最上最尊最第一。釋迦彌勒猶伊奴　「無上呪と稱讃されたのは御最至極。實に最上最尊最第一で。並ぶ物はござらぬ。釋迦でも彌勒でも此般若波羅蜜多の下働をするより仕方は無い」

○此是人々本具物　人々もとより身の內に有て居る價物。有て居ながら見えぬで

浮草をかきわけ見れば底に月。こゝに在とは誰か知らまし

學問上の理屈や。知識上の擬推量で。知た風に濟して居る人等はいづれ般若を境に見て思想を擬つて啄いて居るのじやから。到底自心の物にはならぬ

人問はゞ右にも左にも言ひぬべし心の問はゞ何と答へん

○唯要當人絶後蘇　「唯要る所は當人が眞實にひとつ骨を折て。懸崖に手を撒して絶後に再び蘇る時節が有る。どうぞ其所迄やつて呉れ。こればかりが予がお頼みじや」

是無等等呪

話作兩橛。那一橛著何處。誰道上下四維無等匹。七花八裂。德雲

問古錐幾下。妙峯頂。備他癡聖人。擔雪共塡井

舊年寒苦梅　得雨一時開　疎影月移去

暗香風送來　昨是埋雪樹　今復帶花枝

喫困寒多少　可貴百卉魁

㊟是無等等呪　第四番目の讃歎じや。無等等とは。佛には人天二乘すべて等きものゝ無いのを無等といふ。下の等の字は。佛と佛と等しきの義で無等等と等いふことじや。又無等等と點するときはそれも無いといふことになる。今こゝは凡て比べ物の無いことで。前の無上よりはいよ〳〵此上無しの義じや

㊟話作兩橛　「人々固有の般若は本來無等じや」蓋天蓋地只般若じや。無等なものに無等といふ名は容やうは無い「其儘で濟で居るものを無等などゝ言ひ出すと橛が二本になるぞ」

○那一橛著何處　「其一本の橛は何處へ片付るつもりじや。今一とつの般若が有ならサア出して見せろ」といふ按排にやつた

○誰道上下四維無等匹　誰道の下の七字は碧巖錄の雪竇の頌じや「もとより等匹の無いものへ無等匹などゝ誰がそんな戯言を云たな」

○七花八裂　此四字は物のバラ〳〵になること「大士が一とつの般若を種々に說きちらしてラリコッパヒにして仕舞たは」といよ〳〵叩き落して置て

是から次へ無等等の眞實を出すのじや

○德雲問古錐幾下妙峰頂　是から以下の四句は是も碧巖錄の雪竇の頌で五言四句をソックリ揭げ擧るのじや。德雲とは德雲比丘の事古錐は道ひふるして顆が折て用ひられぬ故間に成た錐といふこと。德比丘の眞德に擬へたもの。是は華嚴經に出て居る事で。德雲比丘といふ大德な活佛が有て。それが妙峰孤頂といふ山嶺に亢坐つて居て竟に其山を下つた事が無いので。ソコデ善財童子が此比丘に相見したいと思つて。妙峯頂へ登つて山中悉く尋ねたが德雲比丘の姿が見えず。逢事が出來なかつた。或日外の山へ登つた時にフイと德雲比丘に相見したといふ事が華嚴經に出て居るのじや。竟に妙峰頂を離れたことの無い德雲比丘がどうして外の山で善財が相見した。こゝに大に子細が有る。雪竇が此端的をゾックリ見拔て幾下妙峰頂と云はれた。竟に山を出た事のない德雲比丘を幾下と頌せられたのは。是は雪竇の力じや。こゝらの眞味に

至つては。知識上の分別では追付ぬ。蒲團の上の仕事で有るのじや

○備他癡聖人擔雪共塡井　德雲比丘の如き活佛は如何な境界をして居るかといふと。呆正直な人を備つて。自身も共々に降積つて居る雪を擔つて運んで來ては。セッセと井戸を塡て居るといふ。なんと智惠の無い事をやつたものの。所が是が容易に解らぬので。此二句の端的に至つては悟の上の一大關門で。十分摺上た眼で無れば。此境界は見えぬじや。ソコデ白隱師が此頌をこゝへ擧て來て悟の標準に揭られたもの。是が見えれば般若も見える。此頌の見えぬ其うちは。般若の體が解つたなどゝ決していふなといふことじや。扨これから次の五言八句で。眞正の學人の修行の樣子を述られるのじや

㊀舊年寒苦梅得雨一時開　是からさきは凡て修行の功を積む。艱難の樣子を喩へたもの。慈明の錐や蒙山の痢疾の類じや。舊年冬のうちに。霜に壓れ雪に埋れ。寒風に曝されて。種々の辛苦艱難を忍耐して來た其功が積り積つて。春と

いふ時節到來すると。溫柔なる東風に誘はれ。穩和の雨の潤ひを得て。馥郁たる梅花は點然と開發する

○疎影月移去。暗香風送來　扨梅の花が開けて見ると。又得も云はれぬ景色が添て來るので。疎影とは薄月の影の事。薄月夜の月影が梅の枝を佩て地上から座敷一ぱい差込で。春の夜風が暖かに暗に梅香を齎して。窓の内へ送つて來る。人ならば浮名や立ん小夜更て窓より通ふ軒の梅が香といふ按排。筆にも詞にも及ばぬ境偶が顯はれて來る

○昨是埋雪樹今復帶花枝　「去年中は雪に埋れて見る影も無い狀態で有たが今年の春は夫とは異つて。枝々に美しい花を持て。實に見ごとな物で有るわへ」

○喫困寒多少可貴百卉魁　扨是迄は「幾多の刻苦患難を喫堪忍んで來たので有て。終に目出たい春に逢ふのは。中〳〵容易な事では無い」サア爰に至る

と花不言人自集。人々其德を慕つて我も〳〵と集つて來る「可貴百卉魁」とは此梅をこそいふので有る」と凡て學道の人に擬へて歎美されるので有る

能除一切苦

劈百合求中心。削圓方竹杖。鞔卻紫茸氈。九九元來八十一。一九與二九相逢不出手

倆若心空及第來　五陰四大一時灰

天堂地獄間家具　佛界魔宮百雜摧

黃鳥張聲和白雪　烏龜帶劍上燈臺

若人欲得此三味　白汗通身須一回

㊍能除一切苦　是で前の四番の讃歎を結ぶので有る。一切苦とは八苦の事で。生。老。病。死。愛別離苦。怨憎會苦。求不得苦。五陰盛苦。の八苦で。凡そ人間の苦とい

ふものを引占て見ると此八ッに歸するので。是を押廣げれば千萬無量の苦となるので。依て一切苦といふので有る。此一切苦を悉く除き去るものは即般若波羅蜜多で。寔に般若波羅蜜多は。人間の一切の苦厄を除き去る所の。大神咒大明咒無上咒無等等咒で有るといふこと

㊟劈百合求中心　百合といふものは中心は無い。一片〳〵に剝てゆくと仕舞まで同じ事で眞といふものは無いので「能除一切苦」といふが。除くべき苦が何處に有る。そんな事をいふのは百合を劈て中實を求て居るやうなものじや

○削圓方竹杖鞔郤紫茸甑　削圓とはけづって丸くする事。方竹は大圓國から出る四角な竹の事。鞔はムシルこと郤は付字で。紫茸甑は花毛甑のこと「除一切苦」などゝ云れるが。苦の外に樂は無い。煩惱即菩提じや。四角な竹は其儘が面白いので。わざ〳〵削つて丸くするやうなもの一向つまらぬ。種々の模樣のある花毛甑の美しい毛を。毟り取て仕舞たら。埒も無い物に成て仕舞は。一切の苦は其儘自己妙用じや。夫を除て仕舞たら。佛になる種が有るまい」

○九九元來八十一　「九ッを九ッ寄ると八十一になる。男は男女は女で其まゝでよいのじや」

○一九與二九相逢不出手　「一九と二九と相逢たが互ひに手を出さなかつた」これはなんの事じや。白隱和尙の末後句じや。講釋は出來ぬ

㊟備若心空及第來。五陰四大一時灰　備とは觀音大士に抗ていふのじやが。其實は學者へ指て示すので。心空及第とは古人の語に。十方同聚會。箇箇學無爲。此是撰佛場。心空及第歸といふて有る是を取て用ひたもので。眞空無相の法身を獲得するといふことになるのじや「根本の眞體が眞正に我物に成たなら。五陰も四大も粉微塵に成て灰に成て吹飛で仕舞で有う」

○天堂地獄間家具。佛界魔宮百雜摧　間家具とは遣ひふるした毀れ道具で。間はひまに成た事。遣ひやうの無い不用な器物といふことじや。百雜摧は微塵

に摧けること「天堂も地獄も不用に成て佛界も魔宮も微塵に摧けて跡形も無くなつて仕舞ふは」扨此三界六通が微塵に摧けて無くなつて仕舞た後は如何なもので有るかといふと

○黄鳥張聲和白雪烏龜帶劒上燈臺

白雪は音樂の名目で「鶯が常よりも聲を張上て白雪の曲を唱へ「烏龜が燈臺に上つて劒舞を舞て居る微妙不可思議な演劇が始まるのじや」

○若人欲得此三味白汗通身須一回

三味は梵語で飜譯して正受といふ和訓で云へば成切といふこと凡て其物其事に成切て仕舞之を三味といふ或は一三味に走てゆくとか又商法三味の仕事三味の又は勝負事三味の遊び三味などゝいふものも皆それになりきつて居ることじや扨此境界を手に入やうと欲ふならば是は情識分別の利口主義ではゆかぬ蒲團の上で骨を折て一と汗帶た上でなければ此三味は得られぬぞ」と是も學者へ示されるので有る

眞實不虛

者箇是大小大虛妄箭過新羅終日交肩我何似生

齊晏殺三士　蜀維敗兩將　假雞聲避虎
賣狗肉懸羊　指鹿見人伏　著蜂斷父望
陶朱攜越女　紀信降楚王　呑炭伏橋下
投簪泣井傍　載主屍兼魴　折父齒咬耳
明中修棧道　暗裏度陳倉　若是親見徹
匣中三尺霜

㊟眞實不虛　是迄說て來た事は一ッとして嘘は無い皆悉く眞實の法門で有るといふこと

提解云上來自心本然ノ妙理ヲ說來ル結歸ノ一句ニ至テ只言ヲ眞實不虛ト且

ク諸人ニ問フ。何レノ處カ是レ眞實不虛ノ處と懸て置く夫から良久日と有て後へ本文の陀羅尼が擧て有る此は是洪川禪師の末後の一句じゃ。輕々に見過してはならぬぞ

◎者箇是大小大虛安　「皆眞實で虛は無いなどゝ斷はるのがそれが大虛安といふものじゃ」

○箭過新羅　新羅は三韓の中の一國の名で有るが。こゝでは只箭が遠くゆき過て仕舞たといふ方言じゃ。そんな徒な斷りを言て居るうちに般若は疾にゆきすぎて仕舞たぞ」これがチョイと見えぬ所で。皆これをやつて居るのじや無字でも隻手でも分別して考へて居るうちに。何時も新羅をゆき過て仕舞て捉まへることがならぬのじや

○終日交肩我何似生　此八字は大燈國師の三轉語の中の一句で。朝結肩夕交肩。我何似生といふのを。略してこゝへ擧たもの。朝から晩まで肩を交へて相對して居る奴がある。それに予が能く似て居るが。如何似て居るかなと懸た詞で。眞實不虛の端的を掲げ擧たので。是は人々工夫ものじや。扨是から以下の頌は眞實不虛の四字に就て般若の智慧の功用を集めて出したもの

◎齊晏殺三士　是ば晏子春秋といふ書に出て居るといふことで有るが。其書は我輩はまだ見た事は無いので。其外には何れの書にも餘り出て居らぬといふこと。たゞ孔明が臥龍岡の梁父吟の中に二桃殺三士。誰爲此謀齊晏子といふ辭が有るので。是は昔し齊國に公孫捷と田開彊と顧治子といふ三人の忠臣が有た。此三人は中〳〵の豪傑で有て。頗る義氣の强い所から所謂頑固物で有たので。慷慨心の餘りから世の人心を騷擾させる事が有るので。ソコデ忠臣では有るが此三人を活して置ては一國の平和を保つ事が出來ない所から。時の執政晏平仲が謀事を以て此三人を殺したのじや。どういふ謀事じやといふと。此三人の居る所へ桃の實を二たつ贈つたので。三人の中へ二つの桃で有るか

ら一人喰はぬ者が出來るわけ。三人互ひに讓り合て果しがつかぬ。スルト忽ち一人が劍を拔て自ら首を刎て死で仕舞た。是を見ると跡の二人りも活て居ては義が立ぬといふわけで。二人りとも劍を拔て自殺して仕舞た。たゞ二ッの桃の爲に道の勇士三人が一時に死で仕舞た。是が晏子の智慧で有るのじや

○蜀雜敗兩將　蜀雜とは蜀國の大將軍姓は姜名は維と云た人の事。此事は蜀志にも魏志にも出て居るので有るが。少し事實が異つて居るので。魏志の方がこゝの意に合ふので有る。其事柄は。各方も御存の三國志の蜀國の事で。孔明も卒去り照烈皇帝も崩御に成て。後主劉禪の世に成て。國勢漸々に衰へて來たので。公姜維といふ智勇の大將が一人有て後主を補佐し。纔に國威を保つて居た。所へ魏國から鄧艾鍾會といふ兩將が軍勢を率て子午谷といふ閑道から不意に攻入つたので。蜀者共大に狼敗して纔に防ぎ戰つたが及ぶ可くも無く。忽ち蜀は攻落されて後主劉禪は鄧艾の陣へ降人と成て出たので。姜維も詮方なく終に鍾會の手に降つたので。鍾會は又姜維の智能を大に悅び。寵愛して居つたので。此時鄧艾は戰功に依て大尉に任せられた所から鍾會は是を快らず思つて心中深く妬で居た。姜維は其妬心有ることを知て鍾會に勸めて鄧艾を魏主へ讒奏をさせたので。忽ち魏主より命が降つて鄧艾を縛して獄に下し威權は鍾會一人に歸し政事を縱まにして居たので。姜維は豫て鍾會が蜀國を我物に仕やうといふ意有る事を知て。其機に乘じて謀逆を勸め竟に魏主に背かせたので依之魏主からは討手の大兵をさしむけられた此時鄧艾を引出して是を斬首し。魏の兵と戰つて鍾會と共に討死して仕舞た。是が姜維の最後の謀事で我身を共に鄧艾鍾會の二人りを殺したので。是を世に姜維一計殺三賢といひ傳へるので有る

○假雞聲避虎　雞聲は鷄の聲の事。虎とは春秋の頃秦をさして虎狼國と稱して各國皆忌み懼れたので虎といへば秦國といふことになる扨此事は史記

の列傳に出て居る事で春秋の時齊國の一族に孟嘗君といふ人が有た此人は姓は田氏名は文と云て才智勝れ勇有て能く士を愛した人で財に富で居たので常に數千人の食客を置て養つて有られて世に孟嘗君と稱されたので有る最も此頃斯ういふ類が諸國に在た。といふのは。諸侯互ひに呑噬の意を逞くして。實に優勝劣敗の世界で有たので國々の諸侯各〻賢才を集めて利國の主義を圖つたもので。趙國には平原君。魏に信陵君。楚に春申君。齊に孟嘗君と。並び稱されて互ひに多くの食客を置て。其花美を爭つたもので有る。此時秦の昭王は頓て四百餘州を合せやうといふ望みの有る人で有るから。孟嘗君の賢才を聞て。秦國の臣下と爲さんかもし否と云はゞ殺して仕舞ふといふ考へで。孟嘗君を欺いて招いたのじや。ソコデ孟嘗君の食客の中で。秦へゆくのは危いと諫める者も有たのじやが。竟に否みきれずして孟嘗君は食客數十人を率て。秦國へ往たので。まづ昭王の心を和らげんが爲めに。世に二たつと無い白狐裘。即ち直千金無雙と稱する所の品を獻上などして首尾よく齊に歸る事を謀つたのじやが中〳〵秦王は許さない。孟嘗君をとりこめて置て再びかへす心は無いので。ソコデ孟嘗君は秦の臣爲らんと迄云たけれども昭王は彼齊の一族で有れば必らず秦の爲にはなるまい。殺すに如かずといふ考へで居られた。孟嘗君其實を知つて大に苦慮して夫から昭王の幸姫に附て賄賂して頻りに哀を乞た。幸姫がいふには。此程王に獻じた白狐の裘を今一とつ妾に獻じたならば執成して遣らうとの事。所が其白狐の裘は世に二つとない貴品で有て。既に秦王に獻して仕舞て有るからして今再び得やうが無い。大に困却した。所がこゝに孟嘗君の食客の中に。狗盜に達した者が有た。狗盜とは狗に成て物を盜む事に妙を得て居るので。其男が狗に成て秦の寶藏へ忍入て。彼の裘を難なく盜み出して來た。夫から其裘を表から幸姫に奉つた。依て孟嘗君は齊に歸る事を許されたので有るが。もしグヅ〳〵して居て是が露顯した時は忽ち殺されるわけ。

ソコデ其夜のうちに準備をして夜逃をした。夫から秦の國境に函谷關といふ關門が有て。こゝは國境の事で有るので。最も出入を嚴重に調べられるので。まづ其處迄は往たがまだ夜半の事で門が明かない。夜の明るまで待て居れば跡から追人のかゝるわけ。さらばとて門は明かず。殆ど進退極つたので有る。こゝに亦食客の中に雞の似聲を上手に爲ものが有た。此男に分附て一ト聲高くトツケコウと啼せた。スルト關の內に居る雞や。村落の雞が。一時に聲をあげて時をつくつたソコデ關の役人が一番雞の規則に從つて關門を開いた。依之孟嘗君主從九死を出て一生を保ち齊國へ歸つたので有る。秦王は跡で思ひ直して。イヤ歸してはならぬと。忽ち追人をかけたけれども。早孟嘗君の立去た跡で有たので。此關からさきは他領で有るから。兵を出すを憚つて其儘引かへしたので。始め孟嘗君が此二人りの客を置た時。他の食客は內〻嘲つて居たので有たが。こゝに至つて孟嘗君の人を舍ざる事を大に感伏したといふこと

○賣狗肉懸羊　是は狡猾な商人の事で。看版には羊の肉を賣といふ看版を懸て置て其實は狗の肉を賣て居た橫著者が有たのじや

○指鹿見人伏　是は史記の列傳に出て居る事で。秦の二世胡亥のとき中丞相趙高といふ姦臣が有て。世主を擁して獨り權威を縱まにしたので。君へ忠義を思ふものは或は罰し或は退け。又は自ら退身するといふわけで。朝臣は皆只威伏して居るといふ形狀で。諂諛の臣を除くの外は內心怨を懷いて居るものが多く有たので。ソコデ趙高が一般の朝臣が己れに伏して居るか伏さぬかを試んとして。或時一頭の鹿を二世に獻じて是は馬にて候といふた。二世笑つて曰く丞相誤邪指鹿爲馬といふとイヤ〳〵是は馬にて候と。是から並居る朝臣に向つて。一同ナント馬で有うなといふた。スルト朝臣は多くは馬也と答へた。中には看々知れた事を馬とも云へずと默つて居た者も有た。又稀には鹿也と實を答へた者も有た。夫から後に趙高が馬也と云た者は皆擧用ひて昇進さ